

未知座小劇場第 38 回拠点興業+鹿狩道三追悼公演

大日本演劇大系第 5 章 Composition16

大阪物語

登場人物

女 1 打上花火
女 2 曼珠沙華

| | | | |
|-------------|-----|-------|-------|
| [1 | 章] | ----- | 0 0 2 |
| [2 | 章] | ----- | 0 0 3 |
| [3 | 章] | ----- | 0 1 0 |
| [4 | 章] | ----- | 0 1 6 |
| [5 | 章] | ----- | 0 3 2 |
| [6 | 章] | ----- | 0 4 8 |
| [7 | 章] | ----- | 0 6 7 |
| [8 (あしがき) | 章] | ----- | 0 7 8 |
| [添 付 資 料] | | ----- | 0 8 2 |
| [奥 付 け] | | ----- | 0 9 4 |

[1 章]

人が乗っても大丈夫な円卓がある。

音楽。

この音楽に和太鼓のリズムが重なる。

女1登場。後ろ向きの歩行。ゆっくり動き始める。円卓に上る。そこは自分の場であり、日本であり、地球であり、宇宙。身体がその境界と渡り合う。円卓からゆっくり落ちる。上る。再び境界を飛翔しようとする。一瞬限界が敗れる。……ようである。破裂。自身の内部。縮小。濃度が増すことにより引力が発生する。ついに自身が自身の重さに耐えられない。破裂。カオス。

女2登場。歩行。おかもちを持っている。出前を持ってきたようだ。白の三角巾に白の前掛けという、いかにもの店員風。

この間、救急車行き過ぎる。電車が通り過ぎる。ヘリコプターが舞って行き過ぎる。街の喧騒。

[2 章]

女1は、テーブルの上に膝を抱えて座り、静かに居る。
女2の歩行は続いている。

女1
女2
女1
女2

女2は舞台上、下手のだいじん柱近くの框の上に盛り塩。これから行われる戦場での武運長久を祈り、厄災退散と大地の豊穰を祈り米をまく。儀式は終わる。

女2 東西、口上あい勤めます。
女1

女2 天におわす我らが大神様よ、種々の木の実を盛った神饌を高くかざして供えん。今、この祭壇の前にかしづき申し上げるは、名も無き流転流浪の河原者の口上なれば、一夜のいくばくかの慰みとして、聞きとどめおかれんことを。ただ、物語の神あらば、直ちに
出雲の国より立ち返り、いで現れよ。しこうして、平成の世の神無月、豊穰の世の開襟を失笑されるは、それもまたよし。これより物語るは、罪深き我らが願い、大地の願い、ふと
ころ深き海原に浮かぶ藻屑なれば、一夜の宴の酒の肴に供されることもあろうが、ゆめゆめその真に受けての世迷いごとにあたうは、これ世の習いにあらず。古来、古より物語らんとする幾多の民は、われらが運命の喜びと悲しみを仰せのとうり黙々と語り続けてきたごとく、このようにこの祭壇の前にかしづく下僕もまた、幾多の民に習い共に、わが運命の喜びと悲しみを、誇り高き言葉で言上たてまつらん。願い叶うならば、天におわす我らが大神様よ、その天上に光り輝く夜空の星のごとくこのひと時を、安らかに見守りたまえ。厄災あらばこの世のすべてとともに 遍くご加護のあらんことを。

と、一升瓶のラッパ飲み。残りの一口で酒しぶき。

女2 いざ物語らん。

女1 ……

女2 ……

女2は円卓の椅子に座る。が椅子はない、椅子があるように身体を使う。

女2 ……

女1 ……

女1は円卓の椅子に座る。が、椅子はなく、椅子があるように身体を使う。

女1 で、どうやった？楽しかった。

女2 ……

女1 夕焼けがあなたの顔を真っ赤に染めた？

女2 ……

女1 ラッキーセブンのジェット風船が飛ぶのんよね。まあ、いいんやけどいやな人もいるやん。…こうして窓から、見るでしょ。私は言うの。「私はかもめ」。無重力はどっちが上かわからへんから、とりあえず適当に決めるんやけど、それがどうしたんの牛タンやん。お美代ちゃんの家は、また食い扶持へらされるようやから、もう、一番下のちっちゃい弟が、それいややん。父上さま、私が行きます、ゆうてしもうたんやて。器量かてまあまあやから、それもそれやろ。で、傘張りの糊刷毛がベロンとすべって糊が顔にベチョで、糊の悪い話しや。でも誰が信じる？電気ゆうんやて。ランプより百倍明るいんやで。外でて上見たら、こんな細い線やで、どないやって油とうすんや。ちょっとやそっとのダイエットしたかてまにあいませんで。では二子山さん、ご焼香を。

女2はおかもちからラーメンを出す。

女2 ……

女1 いくら？

女2 え？

女1 お代

女2 ドルで？

女1 銅？

女2 銅は人形峠。
女1 人形はドール。
女2 そやからドールは人形でドルやないやん。
女1 may be !
女2 ドルでええよ。
女1 ……
女2 それともユーロ？
女1 モジョではダメ？
女2 うちで電子通貨もらってもなあ、かぶれてへんしなあ。
女1 もうかりまっか！
女2 ぼちぼち！
女1 もうかりまっか！
女2 ぼちぼち！
女1 しゃない、2もうかりまっか！
女2 ぼちぼち！
女1 なんで？
女2 ぼちぼち！
女1 いこじやな、5もうかりまっかでどう？
女2 9もうかりまっか！
女1 それやったら1ぼちぼちとかわらへんやん。出前頼んだの一時間前やで。そらないわ。
女2 ふーん、そう。780円。
女1 それは国益にならんで。
女2 内税にしてんやで。
女1 だれに消費税納めるん。
女2 あんた如きに、そこまで言われたない。内政干渉もいいとこや。
女1 こっちは国益にかかわることやで。内政干渉とかいわれてビビルわけには行きません。
女2 国益、国益ゆうてたら、全面戦争になるやろ。負けた方は国際戦争犯罪人やで。国際法廷に出廷するには、ドレス新調せなあかんやん。そんな予算どこあん。特別予算組めるん？この時期に国債発行して、まにあうん。どうせ来年の予算に食い込んでしまうんやから、頭なやまさんならんのはあんたや。そらあんたはダイエットにはなるやろ。でもな、こっちは金利が絡むんやで、臨時国会どないやって召集すん。あんたんとこまだ三種の神器あらへんやん。無理やて、そやろ。レート変わるんでっせ、それだけのリスク背負って790円。
女1 何で十円上がるん。

女2　ここにインテルの16384ビットのチップセット埋め込んでます。証券取引所と無線ラン組んでます。

女1　たいそうなウソついて。

女2　もう十円分しゃべった。

女1　8もうかりまっか！

女2　安いやろ、毎度。

女1　こんな外交交渉ちゃう。

女2　世論の後押しがないとあかんはな。

女1　なんなんこれ。

女2　え？

女1　カラヤン。

女2　ババババーン、ババババーン、ババババーン、

女1　空や

女2　喜びの歌やね

女1　ラップは？

女2　（ラップ）...

女1　ラップかかってなかった。あんた食べたんやろ？

女2　伸びて消えたんちゃう。

女1　割り箸！

女2　ほえ？

女1　8もうかりまっかもとって、何で割り箸があらへんの？

女2　こんなご時世に何で吉野杉の割り箸！もってこれるん。ずれてんで。

女1　.....

女2　よう割り箸やったら何でもええ！ゆわんかったこっちゃん。あんただけが割り箸使うんちゃうわな、みんな使うやろ、年間消費量考えてみたことあるか？山の一つ二つ丸坊主になるんや。植林するやろ、二十年はかかるんや。赤ん坊が、嫁入り前の乙女になる時間や。大切にせな。そやろ。乙女がババアになるだけやあかんはな。歴史を刻まなならん。人生はままならんなどと、そんなドドイツはサッカーや。割り箸！叫ぶ前に国家百年の計を声高に歌い上げろ！

女1　ラーメンがない。

女2　ほえ？

女1　うちは、おなかすいてラーメンを食べたいのでした。そんなあかんことではないでしょう。ごく普通に豚骨のラーメンを割り箸パッチと割って、ズルズルと、ハーって、汗かいて、それだけのささやかな一瞬の潤いを、ここにそっと閉じ込めたいと、一億円の宝くじ当たればよかったことありまへん。シルバーシートの前にはたたへん気遣いは、あるんです。液キャベも事前に飲むんやで。もちろん公衆トイレのトイレトペーパー、引

き出すのは二巻きまで、それに分別ゴミ間違っただことあらへんのや。

女2 何がいいたいん。

女1 ラーメンは文化です。だれがどういおうと、日本の食文化に立派に根をおろしました。私は六年三組の給食当番のとき立派に主張しました。早生まれだったことは隠しません。先生、これはおかしい。何でラーメンは献立にないんですか。善哉と塩こぶがあるんなら、カレーライスとフクシン漬けがあるのに、ラーメンと割り箸と胡椒はないのでしょうか？それはもうシンデレラにガラスの靴とカボチャの馬車がないようなものです。これを三位一体といいます。いいですね、だから桃太郎には犬、サル、雉で日本一ではありませんか。ああ、もうこれは現代思想の冒険です。マルクスの『資本論』はエンゲルスあってこそではありませんか。考えてもみてください。『マクベス』に三人の魔女が登場しなかったら、柄谷行人は困るだけでなく、刺身のつまの立場がありません。あのときの武史くんの鋭い、私に向けられた鋭い眼光は、風速2メートルのそよ風によって行き場を失ってしまうではありませんか。

女2 ちゃう。

女1 武史君を出した、この帰納法は間違いかもしれませぬ。

女2 標準語するんやない。

女1 はいはい。

女2 ハイは一回。

女1 ズルूसー、スー

女2 あのなら、ハッキリ言いたくはないけど、クックズズールルズはいつまでいってもクックズズールルズやん。

女1 おや、コッコッココココ、コケッココーやろ。

女2 ドアはバタン。

女1 まあ、あんたはバタンなん。申し訳ないけど家はバタンや。

女2 ドアはバタン。階段はトントントン。

女1 まあ、トントントンは早起きお母はんのまな板の音に決まってんやん

女2 あんたのトントントンは、父さんお肩をトントントン。

女1 それは階段のドンドンドン。

女2 あのなら言っちゃうけど、アメリカ、ユナイテッドオブアメリカでは虹色は六色。

女1 目えわるいんちゃうか？

女2 そういう話やないやろ。

女1 日本では虹は七色。

女2 あんたどこの国の話ししてん。日本の話ししてどうすん。

女1 だから、パッチで二本、ジャパンになるんやん。割り箸の話しやろ。

女2 だから、パッチやないやろ。

女1 パッチでええやん。

女2 どここの文化の話や。バッシ！や。
女1 パッチやん。
女2 ああもう、割り箸はバッシ！やろ。昔からや。
女1 そないゆうならパッチンや。
女2 それはメンコや。
女1 なにゆうてん、パッチでこそ割り箸や。
女2 いつまでこだわってん、ズルズルと、ハーってまでいかれへんやん。
女1 ズルースー、スーやない。
女2 最初はズルズルと、ハーってあんたはゆうたやん。
女1 ズルズルと、ハーって聞こえたん。ズルズルと、ハーッや。
女2 ラーメンは太古の昔からズルズール、ズルと、ハーハーに決まってるやろ。
女1 耳おかしいで、どこの世界にズルズール、ズルと、ハーハーがあるんや。ズズル、ハーと、これでラーメンというはな。
女2 意固地なやっちゃ。メリケンはんには嫌われる。
女1 うちエベッサンや。はよ、ラーメン食わせて！
女2 ほえ？
女1 ラーメン。
女2 だれが？
女1 あんたはラーメン持ってきたんや。出前頼んだのわたし。
女2 お客さん？ラーメン持ってきたいつゆうた？
女1 ウソー、この時間はなんなん、これ出したやろ、ラップラップやろ、パッチでズルースー、スーや。なしにすん。
女2 思い込みのきつい女？
女1 ラーメンが消えた？

女2はおかもちから手帳を取り出す。

女2 消えた！？
女1 さっきまでズルースー、スー、ズルズール、ズルで、バッシ！
女2 消えたんですね？
女1 唾液まで準備ができていました。ナマ唾ゴックンだったと思われます。
女2 食べてないんですね。
女1 ハアッ、匂いますか？
女2 歯槽膿漏の女がナマ唾ゴックンできたが、いつの間にか。
女1 ズルースー、スー、ズルズール、ズルで、バッシ！
女2 それがすべて消えたんですね？

女1 そうやゆうてるやん。
女2 わかりました。被害届けを受け付けました。この状況から見て、明らかに盗難です。
女1 (あらぬ方を観ている).....
女2 こちらですか。
女1 (東南へ動く)..
女2 犯人はやはり東南の方角に逃げた。
女1
女2 被害額はわかりますか？
女1 8もうかりまっか！
女2 え？
女1 十二時前のレートで8もうかりまっか！
女2 8もうかりまっか？

ノートパソコンから着信音のベル鳴る。集中する二人。

女2 現場検証を行います。立会いをお願いしますが、むやみに動かない！。あとで礼状に署名をしていただきます。

ノートパソコンから着信音のベル鳴る。集中する女1。

[3 章]

女1は受話器をとる。なおこの受話器はノートパソコンの近くに置かれていた、ワイアレスヘッドホンマイクである。

女1 まもなく開局です。マイクテスト、チェック、チェック……

着信音のベル鳴るなか女2がシンセサイダーで演奏する『レットイットビー』が流れるはじめる。

女1 それではオープニングに、今日までのメール投票、集計結果第一位です。歌います。

君に出会えた日は 本当に素晴らしかった
僕は君の そばにいたいんだよ
だからどうか そうさせてほしい

この幸せを 奪わないでほしい
もし君が 僕と一緒に成れないのなら
このままずっと このままでいさせてほしい

Let it be, let it be, Let it be, let it be
Whisper words of wisdom
Let it be

愛を見つけるたびにいつも
僕はそれが 最高のものだと思う
君への愛がなくなってしまうたら
どんなことになってしまうのだろう

だから僕を ひとりにしないでほしい
僕だけを愛していると 言ってほしい

そしていつも このままでいさせてほしい

Let it be, let it be, Let it be, let it be
yeah, there will be an answer
Let it be
Let it be, let it be, Let it be, let it be
Whisper words of wisdom
Let it be

愛を見つけるたびにいつも
僕はそれが 最高のものだと思う
君への愛がなくなってしまうたら
どんなことになってしまうのだろう

だから僕を ひとりにしないでほしい
僕だけを愛していると 言ってほしい
そしていつも このままでいさせてほしい

Let it be, let it be, Let it be, let it be
yeah, there will be an answer
Let it be
Let it be, let it be, Let it be, let it be
Whisper words of wisdom
Let it be

右記の歌詞は「<http://www3.zero.ad.jp/smoke-stings/MWNlibm.html>」
からの転載です。改変しました。さらに意識しなおします。
女1は歌う。女2は演奏が終わると退場。

女1 それではお待ちかねのインターネットラジオを始めます。不定期国立ラジオ放送局の開局の時間が、今日もやってきました。もうすでにアクセスしていただいている、全世界の視聴者の皆さん。お元気でしたか？お変わりありませんでしたでしょうか。相変わらずの騒がしいシャンプーで、いや石鹸で、いやいや世間で、ホイ、快調のオヤジギャグ三段論法とばして、相変わらずのわたくしです。それでは早速、ブラジルにお住まいの、あと十年で六十才になるおじいチャマからの、テキストチャットが届いています。日本のお孫さんへのメッセージです。ご紹介しましょう。みっちゃん、聞いているかな。人生残り

少ないかも知れないおじいチャマから、あと五十年も生きなければいけない、幼少の君への暑い厚いヨタ・力の星です。

女1五尺七寸、極めて健康、.....。.....静寂。いま、この物言わぬ漆黒の闇に、身体を委ねながら、いまだ出会うぬ多くの人々へ、来る日を夢見て試験電波を発信します。CQ、CQ こちら 7MH、出力 5㍑、試験電波発信中、JE3.....いやコールサインはありません。メリット 5 で極めてクリアな方、特にメリット 1 の混信中のあなた、タヌキなどやめて発信願います。

女1 みっちゃん、悪いけど君のあと十年で六十才になるおじいチャマのほうが混線しているようです。でなかったら、十年一昔前のハム無線によって、インターネットラジオが電波ジャックされたのでしょうか。インターネットが電波かだって？そんな細かい話しはさておいて、電磁層に操られ迷子になた 7MH が TCP/IP と出会いました。そんなプロトコルがあるかだって。言うに事欠いたその杓子定規は三寸五分の尺貫法ですか？いいではないですか、パンダが歩くんですから、そんないい加減な無理を言うてはいけません。十数年さまよった電波の波動が、私の鼓膜を揺するなんて、それはもう無理難題に決まっています。無難をまともにに受け答えさせるのですか？視聴者のやさしさはどこに行ったのでしょうか。君も砂の中に銀河が見えないクチですね。

女1十数年、.....それはもう二昔、.....ずいぶんと遠くへ.....思えば日々は多くの年月を数えてしまいました。ついに昭和と平成を股にかけた、名状しがたく横たわってしまった大いなる流れを、心の中であれ、皮膚であれ、美しい沈黙に秘めながら、日本と世界の状況を眺めてきたあなたに、心からのメッセージを贈ります。

.....「わたしが訴えているのはあくまでも平和であります。その崇高なる原則は犠牲であります。同胞たちよ、漆黒の時間が深まれば深まるほど、夜明けは近い」ファイナル.....
...こんな痛みはまだ通用するのでしょうか？通用するなら、発信願います。

女1 みっちゃんまだ聞いていますか。君のあと十年で六十才になるおじいチャマは少々ヤケ気味ですよ。火傷しない程度に聞いちょくれ、

女1わたしは今日まで生きてきました。一回コッキリの生しか生きることしかできないながら、だがそれを、決して他人とは取替えのできない固有の理由で。あなたもまた、そのようにして大いなる流れの中で、美しい沈黙.....それはあたかも、いまこのように漆黒の闇に閉ざされながらも（天空高く一本の指を大らかに突き上げる）ひとたび天空高く舞い上がればそこは満点の煌く星座、数え切れぬ星の輝きがあると信じられるほどの確かな思いを込めた沈黙.....そのような美しい沈黙を秘めてきたのであろうと、わたしは今、そんなあなたに想いを馳せます。そこではあなたはきっと、十全に孤立し、自由に食べ、十二分にクソをし、そして考えて生活している個人でありたかったのだと確信します。ですからあなたは、勇気に徹しぬく諦念を、孤独という寂寞を、ものの憐れという憐憫をこそ、美しい沈黙に秘めさせなければならなかったであろうと推察します。ときあたかも、大いなる流れのなかで美しい沈黙を秘め、なおその美しい沈黙に、勇気と孤独とも

のの憐れを、あらかじめ名付けることを諦観してしまったロマンとして秘めることで、二重の秘め事を秘めてしまったもの言わぬ、それは大いなる流れではなかったのでしょうか。だが、いえだからこそわたしはあなたに宣告します。もう帰るべきロマンはないのだと、美しい沈黙と引き換えに、帰るべきロマンの通路は取り払われてしまったのだと。未だ命名されず無名性の中で佇む美しい憂愁の沈黙よ、大いなる流れとはかくもしたたかであります。

CQ、CQCQ、いまだ出会わぬ美しき憂愁の沈黙よ、こちら 7MH、出力 5㍻、試験電波発信中、JE3.....いやコールサインはありません。試験電波発信、発信願います。このメッセージが.....「わたしが訴えているのはあくまでも平和であります。その崇高なる原則は犠牲であります。同胞たちよ、漆黒の時間が深まれば深まるほど、夜明けは近い」ファイナル... ..と叫ばざるをえない向こうに、信じられぬほどの星空があるとはいいいがたい痛みを... ..いや正確には、そこにはメッセージを発するその裏からそのメッセージを信じられぬという、痛みがあります。もうここではきっと、痛みこそメッセージなのであります。ついに痛みとは(いい切ろうとするが、言い切れない).....そして痛みとはッ!.....! クリアー 5、いやクリアー 1、このメッセージをメッセージ下さい。星座の煌く乱反射にも似て、電波の赴くままに、メッセージ下さい。痛みこそメッセージなのであります。そして痛みとはッ!

こちら試験電波発信中、漆黒の間をこのメッセージが覆い尽くさんことを祈ります。きっとそのとき、そのときこそ、美しき沈黙は、あらかじめ失われた言葉を、ついに発するでしょうかッ!

混線の雑音。電子音。乱反射。

女 1 CQ、CQCQ、いまだ出会わぬ美しき憂愁の沈黙よ、こちら 7MH、出力 5㍻、試験電波発信中、JE3.....いやコールサインはありません。試験電波発信、発信願います。発信.....痛みとはッ!.....ッ! 発信ッ.....発信ッ.....発信ッ.....

混線の雑音。電子音。乱反射のカットアウト。

女 1 はい! みっちゃん楽しく聞いてもらえましたか。君のあと十年で六十才になるおじいチャマからの単純明快なメッセージでした。このほか、やたらとメッセージきてますが、全部昆虫、いやムシ。続いてニュースです。隣のちっとも美人じゃないけど色が白くてカワイイ美代ちゃんが高校二年生になりました。次は密告です。向かい隣の還暦迎えた善次郎さんは、まだ朝立ちがあります。すばらしいけど下ネタの密告は最低ですね。では時間までニュースです。内閣はこのほど、文部科学省から提出されていた臨時法案を、午後の閣議で了承し、明日から開かれる臨時国会の、衆議院本会議に法案として提出する

ことを決定しました。この法案はわが国の標準語を東京弁から、関西弁に変更するという極めて大胆なものとなっております。国民的なコンセンサスもないなか法案が、臨時国会期間中に決議され、参議院に送られるかどうかはあたりまえながら、危ぶまれております。

女1 ……

女1 ……たくさん…… あなたはなくしましたか。……わたしはわからないくらいたくさんなくしたのだと思います。かと言って、なくした分を埋め合わせて余る何かを手に入れたわけではないのです。でもそんなに気にせずに……今日までやって来たのですから。大丈夫。ほら、聞こえるでしょ。耳を澄ますと、微かですが聞こえますよ。懐かしい音や、思い出したくもないあの音も。目を閉じてもいいですよ。瞼のうらに見えるかも知れませんか？でもね、泣くのはやめて……もう、泣くのはやめましょう。わたしにはどうにもできませんから。……涙は流していいことにします。少しだけなら構いません。……そうして元気がでたら……なくしたものを忘れましょう。

人々の歓声が聞こえているはずだ。が、それは女の頭から外したヘッドホンから流れるクラシック音楽。やがて、その音楽は女の声打ち消して、大音響でその場を覆う。しばらく流れる音楽。

女1 ……あの唐突ですが、幸せ、ですか？……今でも……悔いはありませんか？…それは、悔いなどありませんね……これから、だから……ありませんか？そうですね……ありませんね。……そうです、きっとありません。だから……これからもね。……わたしは、もちろんありませんよ。……あなたはどうですか？だから……あの、幸せ、ですか？クエスチョンマーク……てんてんてん

女は先程のヘッドホンワイアレスマイクをつけている。

女1 あなたは幸せですか？……携帯電話の呼び出し音になると、わたしの音なんかじゃないと判っているのに、バックに手をやるわたしが嫌いです。朝起きて、月曜日だと判っているのに、今日は何曜日だったかしらと、ふと思ってしまうわたしが嫌いです。電子メールは、嫌いです。電車の中で化粧するのは嫌いです。嫌いだ嫌いだというわたしはもっと嫌いです。朝靄の中を駆けていく新聞少年の、白い吐息が、きっとわたしは嫌いです。もっと嫌いなのは、バイクに載った新聞おじさんです。階段をバタバタと、早く起きると走り回る、朝の五時半の足音が、本当は一番嫌いです。カトリーヌ・ドヌーブの『昼顔』は嫌いです。女性専用車両は、乗るのですが理由なく嫌いです。ニキビ面の、ませたガキのギラギラした視線は嫌いです。パジャマに着かえての、あすは不燃物と三度唱えるわたしは嫌いです。雨は嫌いです。だから、井上陽水の『傘がない』はもっと嫌いです。満員電車の、ニコチンとアルコールの混ざった人息きれは嫌いです。牛乳の匂いはむ

かしから嫌いです。こんな風に嫌いですと数える数ほどに、嫌いなものはないのに、嫌いだとあげつらうわたしが。嫌いです。

女は一枚一枚トランプを見る。

女1 朝のスッキリした目覚めは遠い昔だね、レースのカーテンを射す朝日が、わたしの微熱を逆撫ですると、決してその日は憂鬱な一日。布団を頭までこうやって被って...
...しばらく死んだふりをすると.....

やけに長い静寂。

女1 まどろむとね、うまくいく。そんな時よく夢をみる。もう特技よね。.....今から2400年前、ギリシャの哲学者デモクリトスは、身の回りの物を小さく小さく切っていくと最後にどうなるのだろうかと考えました。もうこれ以上小さくならない原子を推論しました。いまでは素粒子と呼びます。エネルギーの粒です。わたしは素粒子の粒ですか？

このとき、街並みの向こうにから音楽を従えて、女性の郵便配達員が近づくのが見える。白いヘルメット、ブルーの半袖の上着、紺のズボン、腰に巻きついた例のカバン、七枚剥ぎの足袋。能役者が橋掛かりを登場といった呈。

[4 章]

女2 Macbeth!

と橋掛かりで。やがて登場。

女2 Your face, my thane, is as a book where men
May read strange matters. To beguile the time,
Look like the time, bear welcome in your eye,
Your hand, your tongue. Look like the innocent flower,
But be the serpent under 't. He that's coming
Must be provided for; and you shall put
This night's great business into my dispatch,
Which shall to all our nights and days to come
Give solely sovereign sway and masterdom.

《マクベス夫人》ねえあなた、あなたのお顔はまるで本のよう、だれの目にも怪しい内容を読みとられてしまう。世間を欺くのには世間と同じ顔つきをして、目にも、手にも、口にも、歓迎の色を浮かべることですよ。みせかけは無邪気な花、でもその下には蛇を忍ばせる。せっかくお出向きのお方には、たっぷりご馳走しなくては。ねえ、今夜の大仕事を手早く片づけるのは、全部わたしにおまかせなさいな。首尾よくいけば、これから先に続く二人の長い昼と夜、至上の王権、支配権は二人のものになるのです。

《マクベス夫人・坪内逍遙訳》……{ルビ あなた}貴下{/ルビ} 貴下の{/ルビ かお}面{/ルビ}は誰の眼にも{/ルビ ふしぎ}奇怪{/ルビ}な事の書いてある{/ルビほん}書籍{/ルビ}のやうに見える。{/ルビ はた}周囲{/ルビ}を欺すには周囲と{/ルビ おんな}同{/ルビ}じようにしていちゃい。目にも、手にも、歓迎の{/ルビ こと}意{/ルビ}を示して、罪のない草花と見せかけて、其蔭の{/ルビ まむし}蝮{/ルビ}になってみなくちゃいけません。さ、来る人の待ち受けをせにやなりますまい。今夜の大切な仕事は万事わたしにお任

せなさいまし、未来永遠に無上の権力を得ると得ないとは、それで決る
んですから。

女1 If it were done when 'tis done, then 'twere well
It were done quickly. If th'assassination
Could trammel up the consequence and catch
With his surcease, success, that but this blow
Might be the be-all and the end-all, here.
But here, upon this bank and shoal of time,
We'd jump the life to come.

《マクベス》 やってしまっ

それでやったことになるのなら、

早くやった方がいい。暗殺というこの大きな網で

将来を一網打尽にたぐり寄せる。あの男の息の根を止めて

成功をもぎ取る、それができるのなら、ただのこの一撃で

一切合切のけりがつくというのなら、この世で、

そうだこの世でだ、時の海に浮かぶこの狭い砂州の現世で、

それなら来世のことなど構うものか。

《マクベス・坪内逍遥訳》(独白) やってしまえば、それで事がすむの
なら、早くやってしまったほうが{ルビ い}可{ルビ}い。暗殺とい
う一網を{ルビ くだ}下{ルビ}しさえすれば、一切の結果を{ルビ
ら}羅{ルビ}し尽くしてしまへるものなら、此一撃で以って万事が
終局となるものなら、それが此世での、「時」の{ルビ こちらぎし}此
方岸{ルビ} 此浅瀬での終局であるのなら、未来なんか{ルビ かま}
関{ルビ}ったことはないんだ。

女12 Fair is foul, and foul is fair,
Hover through the fog and filthy air.

《魔女一同》 きれいは、きたない。きたないは、きれい。

泳いで行こうよ、霧でよどんだ空の中をよ。

《魔女三人・坪内逍遥訳》{ルビ きれい}清美{ルビ}は{ルビ き
たない}醜穢{ルビ}

醜穢は清美。

狭霧や穢い空気中を{ルビ と}翔{ルビ}ぼう。

.....

女2 Methought I heard a voice cry 'Sleep no more.

Macbeth does murder sleep', the innocent sleep.
Sleep that knits up the ravelled sleeve of care,
The death of each day 's life, sore labour's bath,
Balm of hurt minds, great nature's second course,
Chief nourisher in life's feast --

《マクベス》叫び声が聞こえた気がした、「もう眠りはないぞ、マクベスが眠りを殺したぞ」、無心の眠り、もつれた心労の糸玉を濃やかにほぐしてくれる眠り、昼間の生への安らぎの死の床、つらい労役を終えた沐浴、心の傷の軟膏、大自然の供する豪華な馳走、人生の饗宴の滋養の一皿----

《マクベス・坪内逍遙訳》何処かで{ルビ どな}呼号{/ルビ}ってる声が聞こえるやうに思へた、「もう安眠は出来んぞ！マクベスが安眠を殺しっちまった」と。.....あの、罪の無い、心の{ルビ もつれ}縛{/ルビ}れを{ルビ いい}好{/ルビ}い{ルビ あんばい}塩梅{/ルビ}に整えてくれる安眠を、其日々々の生の{ルビ じゃくめつ}寂滅{/ルビ}とも、労苦の{ルビ ゆあ}浴{/ルビ}みとも、傷ついた{ルビ こころの}精神{/ルビ}の{ルビ ぬりくすり}薬膏{/ルビ}とも、大自然が{ルビ きょう}供{/ルビ}する二の膳とも、生命の{ルビ おも}主要{/ルビ}な滋養物ともいうべき安眠を.....

女1 That tend on mortal thoughts, unsex me here,
And fill me from the crown to the toe top-full
Of direst cruelty, Make thick my blood,
Stop up th'access and passage to remorse,
That no compunctious visitings of nature
Shake my fell purpose, nor keep peace between,
Th'effect and it. Come to my woman's breasts
And take my milk for gall, you murd'ring ministers,
Wherever in your sightless substances
You wait on nature's mischief. Come, thick night,
And pall thee in the dunnest smoke of hell,
That my keen knife see not the wound it makes,
Nor heaven peep through the blanket of the dark
To cry, 'Hold, hold!'

《マクベス夫人》かしづく悪霊たち、今こそわたしを女でなくしておくれ、

私の全身になみなみと、頭の上から爪先まで、残忍と冷酷を
漲らせておくれ、わたしの血をどろどろにして、
憐れみに通ずる血の管を塞いでしまうのだよ、
せっかくの恐ろしいもくろみに、良心の呵責などが
揺さぶりに入って、なまじ実行を押しとどめることの
ないように。さあ人殺しの手先ども、わたしの乳房に
取り付いて、甘い乳を苦い胆汁に変えておくれ、お前らは
目に見えぬ姿のまま、この世の悪事という悪事に
手を貸しているのだから。そしてたれこめた夜、お前は
地獄のどす黒い死の煙を死人をくるむように厚く纏うのだよ、わたしの
鋭い刃の切っ先がえくつた傷口を見ないで澄むように、
天が暗闇の帷の切れ目から覗き込んで、思わずこう叫んだり
しないように―「やめて、やめて」
《マクベス夫人・坪内逍遙訳》さアさ、恐ろしい{ルビ たくらみごと} 企事{ルビ}の{ルビ かいぞへ}介添{ルビ}をする精霊共よ、早
く来て{ルビ わし}予{ルビ}を女でなくしてくれ、頭から足の爪
先まで、醜い、残忍な心で、{ルビ いっぱい}充溢{ルビ}にしてく
れ！予の血を{ルビ ころばら}凝結{ルビ}せてくれ、憫れむ心な
んかゞ働いて、{ルビ むご}酷{ルビ}い企をぐらつかせたり、実行
の邪魔をしたりしない為に！さア、此の女の胸へ入って来てくれ、や
い、人殺しを{ルビ しごと}職{ルビ}とする精霊共よ、此の甘ッ
たるい乳を苦い{ルビ たんじゅう}胆汁{ルビ}に変っちまってく
れ、目に見えない姿をして、人間の悪事を手伝う{ルビ おのしら}汝
等{ルビ} 今何処にゐるか知らないが！さア、真暗な夜よ、{ルビ お
のし}汝{ルビ}も来て、暗闇地獄の黒煙で、押し包んでしまってく
れ、予の鋭い剣に己が切る{ルビ きずぐち}創口{ルビ}を見せな
いために、天が{ルビ くらやみ}昏闇{ルビ}の幕越しに隙見をし
て、「待て、待て！」と呼ぶようなことがないために。……

女2

I am settled, and bend up
Each corporal agent to this terrible feat.
Away, and mock the time with fairest show,
False face must hide what the false heart doth know.

《マクベス》よし、決心はついた。そうとなったら
全身の力を引きしぼってこの恐ろしい大仕事にとりかかろう。
さあ行こう、時を欺くのは美しい装い、
偽りの心中を隠すのは偽りの顔。

《マクベス・坪内逍遙訳》 ちゃ、決心した。全力を引絞って、此怖ろしい仕事に取り掛かろう。さ、さ、あっちへ。何事もないような顔付きをして人目を欺こう。心に偽りがある時は、{ルビ かほ}面{/ルビ}を偽りで包んでゐにゃならん。

女 1 Whence is that knocking?
How is't with me, when every noise appals me?
What hands are here? Ha! they pluck out mine eyes.
Will all great Neptune's ocean wash this blood
Clean from my hand? No, this my hand will rather
The multitudinous seas incarnadine,
Making the green one red.

《マクベス》あの音はどこから？

いったいおれはどうなったのだろう、音という音にとび上がる。

ああ、なんという手だこれは？う！目の玉がめぐり出される。

大わたつみの果て知らぬ大海原でこの手を濯いだなら

血の穢れを清らに洗い流してくれるだろうか。いや、この手の方が波
また波のはるかな連なりを唐紅に染めなして、
紺青を赤一色に変えてしまうだろう。

《マクベス・坪内逍遙訳》や、何処かで叩く？……どうしたのだ俺は？
音のするたびに{ルビ びくびく}悸々{/ルビ}する。……(手を見て)
あ、何といふてだ？えッ！目の玉が引摺り出されさうだ。{ルビ だい
ネプチューン}大海神{/ルビ}の大洋の水を傾けても、此の手を{ルビ
きよ}浄{/ルビ}めることは出来まい。いやいや、あの限りのない{ルビ
あを}碧{/ルビ}い波が、{ルビ かへ}却{/ルビ}って{ルビ
まっか}真紅{/ルビ}になっちまふだろう。

女 2 Think of this, good peers,
But as a thing of custom. 'Tis no other,
Only it spoils the pleasure of the time.

《マクベス夫人》ごめんなさい皆さん、

いつものことですよ。なんでもありません、

申し訳ないのはせっかくの楽しみを台なしにしてしまつて。

《マクベス夫人・坪内逍遙訳》(人々を制して)皆さん、あれは只ほん
の癖だと思つて下さい。まったく{ルビ さ}然{/ルビ}うなんです
から。只、折角の興を醒まして、まことに。

女 1 Avaunt and quit my sight! Let the earth hide thee!
Thy bones are marrowless, thy blood is cold;

Thou hast no speculation in those eyes
Which thou dost glare with.
What man dare, I dare;
Approach thou like the rugged Russian bear,
The armed rhinoceros, or th'Hyrcean tiger,
Take any shape but that, and my firm nerves
Shall never tremble. Or be alive again,
And dare me to the desert with thy sword;
If trembling I inhabit then, protest me
The baby of a girl. Hence, horrible shadow,
Unreal mock'ry, hence!

《マクベス》出て行け、消えろ！お前は土の中のものだ！

お前の骨に髄はなく、血は冷えきっている。

そうやって睨めつけているお前の目には
ものを見る力などないはずだ。

《マクベス》男にやれることならなんでもやってみせる。

毛むくじゃらなロシア熊の姿で出てこい、

角で武装した犀、ヒルカニアの虎、

いまのその姿でさえなければ、おれの筋肉は

微動だにするものか。生き返って戻って来てもいいぞ、

それで剣を抜いて無人の荒野で決闘を挑んでみる、

少しでも震えるさまをみせたら、乳くさい小娘と

ふれて回るがいい、失せろ、恐怖の影法師、

存在しないまやかしの姿！

《マクベス・坪内逍遙訳》(亡霊に){ルビ さが}退{/ルビ}れ！目
通りを避ける！地の中へ{ルビ はひ}入{/ルビ}つつまへ！{ルビ き
さま}汝{/ルビ}の骨には髄が無く、汝の血は冷たく、汝の目には物
を見る力は無い筈だ、そんなにじろじろ見つめたって。

《マクベス・坪内逍遙訳》(亡霊に)人の敢えてする事なら、何でもす
る。すさまじいロシア熊の姿で来い、角の生えた{ルビ さい}犀{/ルビ}
なり、ヒルケーニヤの虎なりの姿で来い。其姿さへ{ルビ よ}止{/ルビ}
してくれれば、此{ルビ しつかり}堅固{/ルビ}した
筋肉が仮にも慄へるたうな事はないのだ。でなくば、生き返って来て、
{ルビ あれち}荒地{/ルビ}で真剣勝負を{ルビ さが}挑{/ルビ}
め。其時、若し{ルビ ふる}慄{/ルビ}へて引ッ籠ってゐるようだ
ったら、俺を小娘の人形だと悪口しろ。退れ、怖ろしい影め！{ルビ く

う}空{/ルビ}な{/ルビ}ぎぶつ}偽者{/ルビ}め、退れ！

女2 What sights, my lord?

《ロス》見えたとは何か？

《ロッセ・坪内逍遥訳》何を見て、とおっしゃるのでございます？

女1 Macbeth, Macbeth, Macbeth.

Macbeth shall never vanquished be until

Great Birnam wood to high Dunsinan hill

Shall come against him.

《幻影2》マクベス、マクベス、マクベス。

《幻影3》いいか、マクベスに敗北はありえない。

バーナムの大森林がダンシネインの高い丘めがけて

攻めてこぬ限り。

《幻の二・坪内逍遥訳》マクベスよ！マクベスよ！マクベスよ！

《幻の三・坪内逍遥訳》マクベスは、あの大きなバーナムの森が、ダンシネインの高い丘の上へ、攻め寄せて来ないうちは、{/ルビ}いくさ}戦{/ルビ}に負けるということはないんだから。

女2 Yet here's a spot.

女2 Out, damned spot, out, I say. One, tow .Why

then, 'tis time to do't. Hell is murky. Fie , my lord, fie, a soldier and afeard? What need we fear who knows it, when none can call our power to accompt? Yet who would have thought the old man to have had so much blood in him.

《マクベス夫人》まだここにしみがある。

《マクベス夫人》消えておしまい、このいやなしみ、消えて。一つ、二つ、

そうら、時間ですよ。地獄はなんて暗いだろう。どうしたの、ねえあなた、かりにも戦にでる男でしょう、それでこわいの？

だれに知れたってこわいことなんかあるものですか、わたしたちを非難できるものなんていやしない。でもねえ、あの老人の体にこれだけの血が流れていただなんて。

《マクベス夫人・坪内逍遥訳》(独白)まだこゝに{/ルビ}しみ}汚点{/ルビ}が附いている。

《マクベス夫人・坪内逍遥訳》(独白)えゝ、厭アな{/ルビ}しみ}汚点{/ルビ}消えッちまへと言へば！……一つ。二つ。おや、ぢや{/ルビ}もう}最早{/ルビ}時刻なんだ。……地獄は暗い凄惨な処！……まア、何ですなえ{/ルビ}あなた}貴下{/ルビ}は！……{/ルビ}いくさにん}

武人 { /ルビ } でありながら、こんなことが怖くって？ { /ルビ } けど }
気取 { /ルビ } られるのを恐れる必要はないぢやありませんか？主権者
を裁判することが出来る筈はありますのですもの。……けれども、
誰だって、老人に { /ルビ } こんな } 如是 { /ルビ } に沢山血があらうと
は、思いがけてやしない。

女1 What is that noise?

《マクベス》なんだ、あの騒ぎは？

《マクベス・坪内逍遙訳》や、あの騒ぎは？

女2 It is the cry of women, my good lord.

《シートン》侍女たちの声のようです。

《シートン・坪内逍遙訳》婦人たちの泣き声でございます。

女1 I have almost forgot the taste of fears.

The time has been , my senses would have cooled

To hear a night-shriek, and my fell of hair

Would at a dismal treatise rouse and stir

As life were in't. I have supped full with horrors;

Direness, familiar to my slaughterous thoughts

Cannot once start me.

《マクベス》おれは恐怖の味を忘れてしまった。

以前には、夜の叫び声を聞けば

五感が凍りつき、恐ろしい話には

髪が命あるもののように総毛立った

ものだった。だが恐怖という恐怖をなめ尽したいま、

殺戮の思いに慣れ親しんだこの胸は、どんな悲惨にも

驚くということがない。

《マクベス・坪内逍遙訳》怖ろしいという味は、殆ど忘れてしまった。

……夜の叫び声を聞いて冷水を浴びるように感じた時代もあった。凄

い話しを聞くと、{ /ルビ } かみのけ } 頭髪 { /ルビ } が逆立って、いきで

みるように、動いたこともあった。随分怖ろしい目にも逢って見た。

今ぢやァ人殺しにも慣れてしまったので、どんな怖ろしいことも、も

う俺を { /ルビ } おびやか } 脅 { /ルビ } すには足らん。……

女2 Wherefore was that cry?

《マクベス》なんの騒ぎだ？

《マクベス・坪内逍遙訳》や、あの騒ぎは？

と、女2は電報を渡す。弔電である。

女1はこれを受け取り読む。

女1 The queen, my lord, is dead.
《シートン》陛下、お后さまがお亡くなり。
《シート・坪内逍遙訳》お妃がお{ルビ かくれ}死去{/ルビ}になりました。

女2が甲電を読むように台詞が始まる。やがて、女1の甲電を読む台詞が重なる。

女1 2 She should have died hereafter;
There would have been a time for such a word.
Tomorrow, and tomorrow, and tomorrow,
Greeps in this petty pace from day to day,
《マクベス》いつかは死ぬ身であった。
そんな知らせを聞くときもあろうと思っていた。
明日、明日、明日、
時は小きざみな足どりで一日一日を這うように、
《マクベス・坪内逍遙訳》({ルビ きぜん}喟然{/ルビ}として)や
がては死なねばならなかったのだ。いつかは一度{ルビ そ}然{/ルビ}
ういう知らせを聞くべきであった。……明日が来たり、明日が去
り、又来たり、又去って、「時」は忍び足に、。

女1 To the last syllable of recorder time,
And all our yesterdays have lighted fools
The way to dusty death. Out, out, brief candle,
Life's but a walking shadow, a poor player
That struts and frets his hour upon the stage,
And then is heard no more. It is a tale
Told by an idiot, full of sound and fury,
Signifying nothing.
《マクベス》時の記録の終の一語にたどり着く。
昨日という昨日は、阿呆の為に、塵に戻る死への道を
照らしてきた一筋の光。消えろ、消えろ、束の間のともしび、
人生は歩き回る影法師、あわれな役者、
舞台の出のあいだだけ大威張りでわめき散らす、
幕が下りれば沈黙の闇。たかが白痴の語る

一場の物語だ、怒号と狂乱にあふれていても、
意味などなにひとつありはしない。

《マクベス・坪内逍遙訳》小刻みに、記録に残る最後の一分まで経過
してしまう。総て昨日という日は、阿呆共が死んで土になりに行く道
を照らしたのだ。消える消える、束の間の{ルビ ともしび}燭火{/
ルビ}！人生は歩いてゐる影たるに過ぎん、只一時、舞台の上で、ぎ
っくりぱったりをやって、やがて{ルビ もう}最早{/ルビ}噂もさ
れなくなる惨めな俳優だ、{ルビ ばか}白痴{/ルビ}が話す話だ、
騒ぎも意気込みも{ルビ えら}甚{/ルビ}いが、たわいもないもの
だ。……

女2 I should report that which I say I saw,
But know not how to do it.

《使者》この目で見たとおりをご報告いたしますが、
はて、どう申し上げたらよいものやら。

《使者・坪内逍遙訳》御前様……確かに見えましたことを御注進申し
上げるのですが、何と申し上げて{ルビ い}可{/ルビ}い
か存じません。

女2 As I did stand my watch upon the hill,
I looked toward Birnam, and anon, methought,
The wood began to move.

《使者》丘の上に立って見張りをいたしておりましたところ、
バーナムの方に目をやりますと、それが急に、どうもその、
森が動き始めましたので。

《使者・坪内逍遙訳》丘の上で見張りを務めてをりまして、バーナム
の方面を見ましたところ、どうやら森が{ルビ いご}動{/ルビ}き
出しましたやうに存じました。

女1 Liar and slave.

《マクベス》でたらめを言うな、たわけ。

《マクベス・坪内逍遙訳》{ルビ うそ}嘘{/ルビ}を{ルビ つ}吐
{/ルビ}け！

女2 Let me endure your wrath, if't be not so;
Within this three mile may you see it coming.
I say, a moving grove.

《使者》お怒りはごもっともでございますが、でたらめでは
ございません。

この三マイル近くまで迫ってきております。

あれは動く森でございます。

《使者・坪内逍遥訳》もし間違つてをりましたら、どんなお怒りでも受けます。が、御覧なさいまし、ここから三哩の処をやってまゐります。へい、森が{ルビ いご}動{/ルビ}いて{ルビ まゐ}参{/ルビ}ります。

女1 If thou speakest false,
Upon the next tree shalt thou hang alive
Till famine cling thee ; if thy speech be sooth,
I care not if thou dost for me as much.
I pull in resolution, and begin
To doubt th'equivocation of the fiend
That lies like truth. 'Fear not, till Birnam wood
Do come to Dunsinane', and now a wood
Comes toward Dunsinane. Arm, arm, and out.

《マクベス》それが偽りならば

お前を干ばしにしてくれず。真実なら

わたしに同じことをしてくれて構わん。

待てよ、信じすぎでは危ういぞ。真実めかして

嘘を言う悪魔めの二枚舌がそろそろ

怪しくなってきたからな。「怖れるな、バーナムの森が

ダンシネインに攻めてこぬ限り」、それがいま、ダンシネンに

向けて森が動いた。ようし武器を取れ、武器を、打って出るぞ。

《マクベス・坪内逍遥訳》もし嘘だと、すぐ手近の木に{ルビ きさま}

汝{/ルビ}を吊るして、餓死するまで{/ルビ う}打{/ルビ}ッ{/ルビ}

ビ ちや}棄{/ルビ}っておくぞ。事実なら、俺を{/ルビ さ}然{/ルビ}

ルビ}うしたって{/ルビ かま}関{/ルビ}はん。……俺の決心がゆる

るんで、疑いが起こりかけた、悪魔めが、両義語で、{/ルビ ほんたう}

事実{/ルビ}らしい嘘を吐いたのかも知れん。「バーナムの森がダン

シネーンへやって来るまで怖れるには及ばん。」ところが、今、森がダ

ンシネーンへやってきた。……武器だ、武器だ、さア、打って出る！

女2 Aa.....I am sorry, I must be going because there is no time.

女1 Wait. Wait. Please waiting for a moment, and Mr. postman.

女2 No! I am a mail woman.

女1 Oh it has not understood at all. Are you a Lady?

女2 I am a mail woman.

女1 Oh You are a woman mail clerk, Mrs. Robinson.

女2 What do you say? What is Mrs. Robinson?
女1 Uo uo uor, Uo uo uor, Hei Hei Hei, Hei Hei Hei
女2 I am Ms.
女1 Oh Ms Ms Mistake. Certainty? The truth? It is unbelievable!
女2 The joke is stopped. Your joke is the same as your face, and the hobby is bad.
女1 My figure is unrelated, Mrs. Robinson?
女2 I am not Mrs. Robinson. Please play without permission. And, it obstructed it.
女1 Wait. Wait. Please do not return.

と、女1は電話の受話器をとる。

女1 Roux, Riririn, Plplu, Roux, Riririn, Plplu, Hello, Hello. Please wait a little because it is a visitor inside. Is it good?

と、急に女2へ。

女1 Sergeant Jenkins, be wait. Do not go because it becomes a foreign countries escape.

と、再び電話に。

女1 Hello, I am sorry. It prints with what. Can you speak Japanese? I cannot speak Japanese. However, it manages to talk about the Kansai language. No, it is not a Kansai valve. It is a Kansai language. The trouble was put. We wish to express our gratitude for your consideration. Are you Mr, Godo?

半音お声が、いつもより下がっています。お体が悪いのではありませんか？……警視総監殿！それではお言葉に甘え、関西弁で報告させていただきます。いえいえ、恐れいります。わたしなんぞは、寄る年波に負けまして、とんといけません。

女2 What happened?

女1 はっ！大変失礼しました。最近通信事情が安定せず、ときおり河内弁が乱入して参ります。一時の混線ですので、ご容赦ください。はっ！熱海よりこちらに参りまして、はや二十年となります。つつがなく勤めに励んでおります。とは申しまして、いまだ関西弁になじめず、不肖、桂伝兵衛不徳のいたすところであります。何を申されます。いえいえ、大阪出身の警視総監殿の、足元にも近づけません。近づくどころか、大和川のヘド

口に足を取られて、道頓堀川から浮かび上がれない始末であります。女子供のいたす電子飛脚に手を染めましたが、キーボードの上で、器用すぎる私の指先が、素人同然の駆け出し漫才師の持ちネタより早く、眼にも留らずすべりまくるものですから、関西弁インプットメソッドがゆうことを聞いてくれません。ノートパソコンなど川原の草スキーで遊ぶ、袖口が青鼻こすり付けてテカテカに光った悪ガキにくれてやるのがちょうどでありました。それ以来私が、口ずさんでおりますのは関西語であります。

警視總監殿！ただいまより関西語にきりかえます。

女2 関西語！

女1 そうであります。警視總監殿！ご記憶でありましょくか？ちょうど十年前の一月十七日、午前5時46分、関西弁が関西語になった瞬間であります。東京一極集中の弊害、地方都市無視の防災体制の遅れがもたらした、不条理な事態と犠牲者でありました。ご存知のように昨今も、日本の標準語を東京弁から、関西弁にという法案が審議されていますが、関西語は自立しなければなりません。関西は東京の属国ではないのであります。生ぬるいのであります。たかだか一国の中で、標準語の位置を狙ってなんといたしますか。警視總監殿！関西語は独立しなければなりません。独立してこそ犠牲者は浮かべれます。また、それでこそ独立国、関西は国語を持つことになるのであります。はい、ご安心ください。このほど憲法草案を起草いたしました。なずけて生駒草稿。前文、本文、付記とも一文「すべては疑いうる」であります。もちろん進行中であります。関西市民希望者で投票を行っております。得票6433、ただいま一位「レット・イット・ビィ」。五票差で「六甲おろし」、十八票差で三位、河内音頭「河内十人斬り」が続いております。いずれかがはれて、市民に口ずさまれる国歌になろうと、二言があるものではありません。今の私の日々は、独立記念日の式典で、供される「マクベス」上演の練習に余念がありません。はい、不肖、桂伝兵衛が「マクベス」を演じます。国家独立とは、影に日にさまざまな軋轢があるものであります。強引な戦略戦術もございます。不肖、桂伝兵衛、すべての責任をとり、人民裁判の断頭台の露と消える覚悟であります。まこと私に相応しいマクベスの最後であります。私はついにそのようにして、マクベスとして関西市民を信頼し、その市民の未来に希望を託すものであります。どうして私だけが生きのべられましょくか？

女2 ハイハイ

と、女2は電報を渡す。祝電である。

女1 I pray you, speak not; he grows worse and worse;
Question enrages him. At once, good night.
Stand not upon the order of your going,
But go at once.

《マクベス夫人》いいの、話しかけないで、どんどん悪くなりますか

ら。

質問するといらだつばかり。すぐにお引き取りを。

退出の順序などはどうか一切お構いなく。

さあさあ、早速に。

《マクベス夫人・坪内逍遙訳》どうぞ{ルビ なんに}何{/ルビ}も言わないで下さい。だんだん様子が悪くなる。問答をするに、尚ほ{ルビ げき}激{/ルビ}します。……すぐお開きにしませう。退席の順序なんぞにゃ{ルビ かま}関{/ルビ}はず、さ、すぐにお{ルビ さが}退{/ルビ}り下さい。

女2 Good night, and better health

Attend his majesty.

《レノックス》それでは失礼を。陛下のご回復を心よりお祈りいたします。

《レノク・坪内逍遙訳》さようなら。陛下が速やかに御全快遊ばされますよう！

女1 A king good night to all.

《マクベス夫人》皆さまお休みなさいまし。

《マクベス夫人・坪内逍遙訳》では、どなたも御機嫌よう！

女2 Good night, and better health

Attend his majesty.

《レノックス》それでは失礼を。陛下のご回復を心よりお祈りいたします。

《レノク・坪内逍遙訳》さようなら。陛下が速やかに御全快遊ばされますよう！

と、女2は電報を渡す。弔電か？

女2 とりあえず今夜で最後です。残業でやってんやないの、あたしの好意なの。オールドイングリッシュ勉強なんであたしが、せんならんや。そやろ、昼に配達指定して悪いことないやろ。別にあたしが届けんでもええやん。自分で自分に電報出すのは、そらあんたの勝手やさかい文句はありまへんや。でも、今後一切、あたしに届けいなんぞ、そんな無茶ゆわんとして。よろしいな。民営化なってもあたしはしりまへんで。

女1 Is it a Kansai language?

女2 This is a Kansai valve.

女1 Oh! It is good at intonation. It is beautiful.

と、女2は電報を渡す。祝電か？

女2 顔ほどやない。なにベンチャラゆうてや、知らん知らん、知らんで

と、退場。

女2 1 She should have died hereafter;
There would have been a time for such a word.
Tomorrow, and tomorrow, and tomorrow,
《マクベス》いつかは死ぬ身であった。
そんな知らせを聞くときもあろうと思っていた。
Greeps in this petty pace from day to day,
《マクベス》時は小きざみな足どりで一日一日を這うように、
To the last syllable of recorder time,
《マクベス》時の記録の終の一語にたどり着く。
And all our yesterdays have lighted fools
The way to dusty death. Out, out, brief candle,
Life's but a walking shadow, a poor player
That struts and frets his hour upon the stage,
And then is heard no more. It is a tale
Told by an idiot, full of sound and fury,
Signifying nothing.
《マクベス》昨日という昨日は、阿呆の為に、塵に戻る死への道を
照らしてきた一筋の光。消えろ、消えろ、束の間のともしび、
人生は歩き回る影法師、あわれな役者、
舞台の出のあいだだけ大威張りでわめき散らす、
幕が下りれば沈黙の闇。たかが白痴の語る
一場の物語だ、怒号と狂乱にあふれていても、
《マクベス・坪内逍遙訳》小刻みに、記録に残る最後の一分まで経過
してしまう。総て昨日という日は、阿呆共が死んで土になりに行く道
を照らしたのだ。消えろ消えろ、束の間の{ルビ ともしび}燭火{/
ルビ}！人生は歩いてゐる影たるに過ぎん、只一時、舞台の上で、ぎ
っくりぱったりをやって、やがて{ルビ もう}最早{/ルビ}噂もさ
れなくなる惨めな俳優だ、{ルビ ばか}白痴{/ルビ}が話す話だ、騒
ぎも意気込みも{ルビ えら}甚{/ルビ}いが、たわいもないものだ。

……

この英語の台詞は『マクベス』(大場建治 刊・研究社)からの引用である。また、一部『小説・熱海殺人事件』(つかこうへい 刊・新潮社)からも引用した。明記して謝意を表す。

さて、ここでの観客は日本人を想定しているので、発せられる英語は観客に言語として届かないであろうと容易に想像できる。

そのように想定している。つまり、英語を俳優は喋っているのだが、何を言っているのか解らない、となるのだろう。そこで対訳の字幕を用意することにしよう。すると、日本人の俳優が演じ、英語を喋る舞台を、日本人が観ながら、日本語の字幕を見るということになる。

なお、邦訳は坪内逍遙のものを使用しよう。

[5 章]

ドアを「トントン」と叩く音。

女1 そんな「ドンドン」叩かんかてベルついてますよ。

ドアを「ドンドン」と叩く音。

女1 そんな「ドンドン」叩かんかて聞こえてるって、どなたな。

ドアを「ドンドン」と叩く音。

女2 初めてお伺いしますが、後藤はんッ！ようお聴き、これがドンドンドンや。

女1 だから、近所迷惑やて。

女2 これがトントントンで、ドンドンドンはこれや。

女1 はいはい、ようお越し、だれでもかまんからお入り。鍵開いてます。

女2 ハイは一回や。

女1 ハイ！

女2 （ドンドンと叩く）これは！

女1 トントントンや

女2 後藤はん、まだ見ぬあんたにお聞きしますが、いったい耳掃除いつしたんや、おとといか？

女1 母さんお肩を、

女1 2 トントントン！

女2 お邪魔します、こんばんわ。半身阪神ファンの田淵です。盆と正月一緒に運んできましたで。

半身阪神ファンのなので、帽子、ハッピー、メガホン、タオルの半分がトラ模様のいでたちで登場。大阪のおばちゃんがよく持つ買い物籠も持つ。

女1 半身阪神ファンの田淵はん？でそのハンシンハンシンは最初が阪神、それとも

半身？

女2 順番がチャウヤロ。何の御用ですか？が世間ヤロ？あるいは、名のらんかい？それが、エーと、エーと切符ヤロ。

女1 あつは、ぷふい。

女2 エーと切符ヤ

女1 切符？

女2 仕舞いに怒るで、エーとチケットヤ。

女1 もう入って来たんヤから、戸はイラク。

女2 イラク？

女1 戸は、イラン。

女2 そうヤエー、チケットヤロ(間)エチケットヤ。バンザイ！こんな長いネタ振り回わさして仕舞いに怒るで！

女1 あつは、ぷふい。

と、女2のメガホンを放る。

女2 なにすんヤキー坊、なんでメガホンほうるんヤ、見えへんちゅうんヤ。

女1 メガネならそこヤ。

女2 どこヤ、どこヤ。ここカ？こっちカ？

女1 みえてるヤん。

と、女はメガホンを取る。

女2 こんな古いネタヤらして、だれがわかるちゅうんヤ。ねえちゃん、仕舞いに怒るで！

女1 あんただれなん。

女2 名前なんて……ここに居るだけで幸せヤ。

女1 でッ！

女2 こんばんわ。半身阪神ファンの田淵でんねんヤわ。観てわからんカ、ここまで心的領域を形象化さして、これ以上なに説明せえちゅうんヤ。慮らんかい、標準語で喋ってんとチャウヤロ。見てのとうり傷心の身ヤ。

女1 へー

女2 なんなんその感嘆疑問は、

女1 立派ヤなーて

女2 何が？

女1 大変ヤなーて

女2 どうゆうふうに、
女1 ところで田淵はん、
女2 田淵ほどきれいな放物線を描くホームランバッターはおらへなんだ。でもな、抗議すんのはボールひろうてからやて、試合続行中やん、そやろ、泣く泣く西武に奉公出したんは親心やて。それを友情に応えたかて、帰ってきてのヘッドコーチはないやろ。男涙は 忍んで、耐えて、意地でも監督やろ。で、岡田に、もうちょっとスマイルせやゆうたったんや、努力は認める、笑窪までつくれゆわんから、ちょっとは白い歯みせてのスマイルやろ。
女1 歯磨くのわすれたんちゃう。
女2 ムスとすんやったら虫歯なおしてからや、奥歯かみ締められへんやろ。今日の六甲おろしはヤケに身にしみるなあ。
女1 淵ッ！プチッとくるぞ！
女2 静かにしい。何のためにこんなに喋りながら無口になってるんか分からんやん？
女1 結構なお手前ですなあ。
女2 抹茶に茶柱の心境で、明鏡止水。
女1 誰が千姫や。
女2 うまいことボケまんなあ。はいはい、気いすんだらシャラップ。
女1 ……
女2 ストライクやな。間違いない、キンコンカンカンのキンコンカンカンや。キンコンカンカン、キンコンカンカン。
女1 何回金柑塗ってまた塗るんや。
女2 姉ちゃんあんただれや。
女1 表札みたやろ、後藤さんです。
女2 ゴドー（後藤）はん？なんか他所いきやな。ホントは仙ちゃんやろ。
女1 仙ちゃん？
女2 わてが田淵はんでおます。あんたが仙ちゃん。収まりが非常にええ。なんでやろ。
女1 なんですって？向かいが山本はんやから、奇跡でっせ。まったく本当のような話やな。田淵はん、あんた筋書きのないドラマ運んできたんか？
女2 ところで後藤はん。
女1 仙ちゃん。
女2 いつの間に。
女1 七回の裏にはすでに。
女2 ところで仙ちゃん、あんさんいったいここに住んで何年になりますんや。
女1 シャワーの水がプチパチプチの頃から、五年。

女2 ……

女1 ウソつきました。十年一昔、住めば都で、光陰矢の如し、畳のメ七回数え終わりました。八回目に突入した今年の春、愕然としたのは、あたしだけでしたでしょうか？畳表のメが潔く擦り切れているではありませんか。ウソー、わたしは畳表のメに、目を疑いました。田淵はん、私の畳表のメは、いったいどこに消えていったのでしょうか？

女2 畳の淵踏んでまっせ。

女1 一つ一つ記憶を刻みつけた、あの私の畳表のメはもう、帰ってこないのでしょうか？畳表のブラックホールに飲み込まれた、私の畳表のメはいま、どこをさまよっているのでしょうか。きっと私の記憶が多すぎて、比重が極限に達し、ビッグバンを起こしたに違いありません。限られた思い出でよかったのです。

女2 もうええか、で、耳掃除いつしたんや、やっぱ一昨日か？

女1 抱えきれない思い出を、これでは垂れ流すしかありません。一つの畳表のメに一つの思い出をそっとしまっせて見せましょうか。泣くに泣かれぬ天満橋、枯れてしまえと星を見上げた州崎橋、それでも追うに追われぬ水分橋、数えて収めた八百八橋の数ほどに、数に限りはあるたとえ、それなのに、この先、垂れ流さなあかんとは、そら殺生や。一足づつに消えて行く。夢の夢こそあはれなれ。あれ数うれば暁の、七つの時が六つ鳴りて残る一つが今生の、鐘のひびきの聞きをさめ。

女2 キンコンカンカンのキンコンカンカンや。キンコンカンカン、キンコンカンカン。

女1 田淵はん、ゴーンやろ。

女2 またてんごゆうて、あてはな、こう見えても前は、近鉄ファンやったんや。

女1 それで、この半身阪神ファンかいな。

女2 物事は奥までみいよ、まあええ、つまりやな、このキンコンカンカンが聞こえてか。

女1 え、何が？

女2 聞く気ないやろ。何年住んでまんのや。申し訳ないやろ。

女1 はばかりながら、共同便所の水洗の音、隣の学生の話し声、天井裏を駆け回るトムとジェリー、階段ギシギシ軋む音、丑三つ時に、どことなく聞こえてくる人生のため息、もう申し分なく過不足なくそろって充分やから、文句はありません。

女2 ご立派やがな、これは電車や。

女1 ツレイン？

女2 間違いなく、近鉄電車の踏み切りの音や。ええなあ、こうやってここにいるだけでキンコンカンカンやろ、涙でるやないか。この家はええ家や、アンさんは幸せもんや。人生に感謝せなな。ジーンと心に沁みるな。まるでパチンコ屋で聞く蝉時雨やなあ。

女1 訳わからん。

女2 いつでも訳わかんと思うなよ。闇夜の晩かてあるんや。でも、このキンコンカ

ンカンの情緒は嗅ぎ分けなあかんわな。はよ来いよキンコンカンカン、危ないぞキンコンカンカン、飛び込むなよキンコンカンカン。耳澄まさんが、ここは耳澄ますとこやろ、胸に手当てる。なんで細かいとこに手を抜くんや。弓手が下で、馬手が上、静かに当てるんや。ここはぐれたら一生もんや、ワレ根性入れたれよ。

女1 いつの間に河内弁になったん？

女2 細かいことゆうたらあかん。可愛げなくなる。夕焼け小焼けでキンコンカンカン、ハイ！

女1

女2 明日もお勤めキンコンカンカン、ハイ！

女1 ハイ！みなさん最高ですか！

女2 きらきら輝き、お手てつないでキンコンカンカン、ハイ！

女1 ハイ！みなさん健康ですか！

女2 カラスと一緒にキンコンカンカン、ハイ！

女1 ハイ！みなさん絶望的に幸せですか！

女2 悲しい。

女1 ハイ！みなさんは、本当に幸せですか？

女2 仙ちゃん、あんたそんなこと口にして、恥ずかしさに押しつぶされるやろ。わかります。わかりますがそれをいっちゃお終いよ。

女1 言うに言われぬ信濃橋、けど、恥ずかしさこらえ、いわなあかんときは、殺生やけどいわなあかん。ためらう街に、傘もささずに濡れ鼠、チュウと鳴いて、大見得きつて宙返り。蛙が鳴くからかえろ、ハイッ！

女2 泣きたいのはあんただけやおまへんで、でも体は鍛えなはれ.....

女1 半信半疑の田淵はん。

女2 半身阪神ファンの田淵や。

女1 それでも半信半疑の田淵はん。

女2 ホンマノのことはこそっと、聞こえんようにいえ。

女1 悲しかったら泣きなさい。

女2 そうや、半信半疑で半身阪神ファンの田淵です。昨日まで近鉄ファンでありました、全身阪神ファンにはなりきれてません。そんな田淵です。

女1 幸せは歩いてこない、手のひらに太陽を、三步進んで二歩下がる。真っ赤に燃える君の血潮、人生はワンツウパンチ！

女2 ワアチャ、アチャ、アチャ！タッタタッタッタ、百裂拳！お前はもう死んでいる。

女1 もしかして、それケンシロー。

女2 さもありなん。正確に。

女1 北斗神拳！

女2 はい、出ました。
女1 それ以外ありまへんやん。
女2 一撃ッ！
女1 ノースイーストッ！
女2 北斗！
女1 そやな、東南がこっちやから、ケンシロー、北東はこっちやッ！
女2 ストライクツウ。キンコンカンカンのキンコンカンカンや。キンコンカンカン、キンコンカンカン……間違いなく北東の彼方から聞こえるキンコンカンカン。
女1 こんなんええんやろか。
女2 疑うな！疑えば、屋根まで飛んで、壊れて消えた人生も、単なる影法師。バーナムの森が動いてこそ人生やおまへんか。
女1 ……キンコンキンコン、キンコンキンコン、キンコンキンコン、キンコンキンコン。
女2 それは阪神電車の踏み切りや。
女1 チンチン、チンチン、チンチン、チンチン、チンチン。
女2 下品はあかん。踏み切りに差別さしたらあかん。何のために女名詞のナ入れたんや。JRになってチンナチンナ、チンナチンナ、チンナチンナや。でも聞こえるのは京阪のキンコンカナ、キンコンカナ、キンコンカナでっせ。
女1 南海やろ、京阪はコンキン、コンキン、コンキン、コンキンや。
女2 なんやて、そしたら近鉄は？
女1 カンカン、カンカン、カンカン、カンカン、カンカン
女2 あかんかん。阪神は？
女1 カンカン、カンカン、カンカン、カンカン、カンカン。
女2 あかんで、阪神も近鉄も同じやったら、メセナわからんなんやん。
女1 JRも南海もカンカン、カンカン、カンカン、カンカン、カンカン。
女2 仙ちゃん、あんたなにゆうてんの、しかりしいや。
女1 京阪も阪急もカンカン、カンカン、カンカン、カンカン、カンカン。
女2 仙ちゃん、仙ちゃんて……
女1 やっぱり、大阪は独立します！
女2 体鍛えて、あんじょうお気張り。
女1 ……
女2 若者よ、体は鍛えておけ。……どうしたん、仙ちゃんッ！
女1 あんた何しにきたん！
女2 仙ちゃんッ！あんな、踏み切りがみんなカンカン、カンカン、カンカン、カンカンやったら、はよ来いよキンコンカンカン、危ないぞキンコンカンカン、飛び込むなよキンコンカンカンで今日まで来たあたいは、あの訳の解らん踏み切りのまえで、電車が

き過ぎるのを待ってはる、世間の人々はどうなりますんや。どなりますんか。そんなことでホンマによろしんか。はよ来いよカンカンでそら昔は電車がきて、向こうに行ったかもしれまへん。いまははよ来いよカンカンではなんともなりまへんのや。危ないぞカンカンでどうなりますかいや。危ないぞキンコンカンカンでっしゃろ。ここ何年間もそうしてきましたんや。飛び込むなよカンカンで、ちっちゃい子が電車と「こんにちは」したら、取り返しつきまへんのや。そやから飛び込むなよキンコンカンカンでっしゃろ。

女1 ガタンゴト、ガタンゴト.....ガタンゴト、ガタンゴトは聞こえまっせ。聞こえないのはなぜですか？貴方には聞こえるんですか？

女2 それゆうんなら、ガタンゴットン、ガタンゴットン、ガタンゴットン、ガタンゴットン.....ちっちゃい「オ」の入ったゴットンです。北東の方角から、かすかなガタンゴットン、ガタンゴットンを打ち消して、キンコンカンカンのキンコンカンカンがやってきます。踏み切りの前では、思いを先に差し出して、時をやり過ごす人たちがいます。それは行過ぎる電車を待つのでしょうか。いつもいつも、明日も、やがて来る日も、決まって電車を待つと思いますか？

女1 聞こえないのはなぜですか？

女2 だから、いつもいつも決まって電車を待つと思いますか？

女1 あたしは、なに待ってるの。

女2 阪神電鉄の軌間は 1435 mm。つまり軌道間、二つのレールの間がな、少々大きいんだす。で安定してるから、列車の通る音が小さいのんや。

女1 線路に継ぎ目がないからやろ。

女2 何で鬼の首とった桃太郎みたいにゆうん。楽しいか？そら新幹線のレールの長さは 1500 mもあるやろ。それがどないしたん。そら岡山には新幹線は止まるやろ。それがどないしたん。あんたのおかげか。

女1 じゃ阪神電車はどのくらいなん。

女2 なんで、近鉄電車て先に訊かへんの。美味しいところは後に残そうよ。

女1 近鉄電車は？

女2 何で鬼の首とった金太郎みたいにゆうん。琴ヶ浜の内掛けやん。

女1 ほい。

女2 名手大関、琴ヶ浜が内掛け決めて、それは当然の決まり手や。それは当然やけど焼け火鉢、期待しますわな。決めますわな。それが琴ヶ浜の内掛けやん。

女1 近鉄電車は？

女2 ようお越し。そらないわ、あんたは自分で調べなはれ。

女1 知らんねやろ。

女2 ここで問題です。1500 mもあるロングレール、一体どのようにして運ぶのでしょうかお答えください。

女1 ガタンゴト、ガタンゴト、ガタンゴト、ガタンゴトやろ。

女2 そうや、聞こえへんのやろ。だから聞いたやん。
女1 聞こえへんゆうてんのに。
女2 だから聞いたゆうてんのや。あのな、耳掃除いつしたんや、おとといか？
女1 あんたはキンコンカンカンや。キンコンカンカン、キンコンカンカン...
女2 そうや、そのとおりや。
女1 だったら何でガタンゴットン、ガタンゴットンや。
女2 だれがガタガタや。
女1 あんたが、阪神がガタンゴト、ガタンゴトで、近鉄がガタンゴットン、ガタンゴットンて区別したんやろ。
女2 つまり近鉄の軌間は 1067 mmやから、違いはあって当然やろ。
女1 京阪は。
女2 京阪、阪急も 1453 mm。
女1 銀河鉄道は。
女2 えっ、あんたはカンパネルラか、それともジョバンニかどっちや。
女1 関係ない。銀河鉄道の軌間はッ！
女2 宮沢先生しか知りません。
女1 半信半疑で半身阪神ファンの田淵なんやろ。なんとかしなさいよ。
女2 それとこれとはちゃうでしよ。
女1 そんな台詞は、脈絡ある話をして言いなさい。
女2 ハイ！まことにおかしい話でしたが、これは本当は軌間の話しではありませんので、銀河鉄道の軌間は.....訊かんでおいて。ハイ、オチました。お後がよろしいようで。
女1 ハイ、お囃子。引っ込みます。拍手、さようなら。
女2 オフサイド！
女1 落語とちゃうん。
女2 もとい、ボーク！
女1 退場！
女2 よおそんなアホなこと言うわ。こう見えてもうちの半身阪神ファンの田淵でっせ、抗議はします。
女1 監督を呼べ、監督やないと抗議は受け付けません。
女2 仙ちゃん！
女1 わたしが仙ちゃんです。
女2 カン、カン、カンで聞こえるか。鐘打つカン、カン、カンみたいに愛想のない金属音とちゃうで。電気拡声器を通したカン、カン、カンというまるやかな、近代的な電気音のカン、カン、カンや。長瀬のむこうにミトという駅あるんや。その踏み切りは、昭和三十年からまだそのカン、カン、カンなんや。もう他にあらしまへんのや。あそこだけなんや。雨の日なんかな、ちょっと湿ってカウン、カウン、カウン。風の吹く日はクォン、

クオン、クオン。がんばっとります。

女1 今日もな、そして明日も鳴ります。昨日までズーと鳴ってきたんやから、明後日かて鳴ったらあかんとゆわれませへんからな。そうやって今日までできました。そうやる。

女2 そうや。

女1 だったら何の文句を言いに来ましたんや。それとも事件、御用は？

女2 そらまあ。

女1 そらまあッ？

女2 そら、まあ！

女1 2 そらまあ、まあッ！

女2 昨日な、スーパーでなスーパーマンが一玉三百六十円もしてたレタスな、百円で投売りしてたんやで。えらい事件や。

女1 スーパーマンの出現が事件かい、それとも一玉百円がかい。それとも見たこともない、さぞ華麗な投売りだったんやろなあ、うちも一目みたかったなあ。

女2 一昨日な、向かいの商店街の奥の銭湯に……

女1 ほう、セントウいうぐらいやから、一番風呂でしたか？

女2 そらまあ…

女1 それとも血まみれの男が駆け込んで来ましたか？そこではさぞ凄惨なセントウシーンが繰りひろげられたんでしょうなあ。

女2 そら…

女1 まあッ！

女2 そらまあ、ダ洒落いうのんは、あんまり拘らんとスーと通り過ぎるんが粹やか
らな。普通銭湯ものはユウだけやから。

女1 ほう、そんなんいうのは何処のダレジャ。

女2 そらまあ色々あるけど、一番の事件は、一昨々日な、郵政民営化に先立って、
一丁目と七丁目の特定郵便局が、売り上げ上げなならんやろうからて、ためしに接客のシ
ュミレーションしたんやて。テレビでもニュースになったから、ひょっとして視たかなあ。

女1 初耳やで。

女2 えらい騒ぎやったんや。

女1 ほうそう、そら大変や。で、どっちがユウセイやった？

女2 ……

女1 で。

女2 そらまあ。

女1 そらまあッ？

女2 そら、まあ！

女1 2 そらまあ、まあッ！

女2 ……仙ちゃん

女1 半身阪神ファンの田淵はん？
女2 ぼちぼち失礼します。
女1 え？ウソー。
女2 仙ちゃん。うちらちょっとだけ、お知り合いになれたやろか？
女1 多分、昨日よりちょっと。我慢したダ洒落の分だけは。
女2 事件やろか？
女1 どやろか。
女2 そやな。
女1 ……あの
女2 なんやろ。
女1 何もないで。
女2 そうか、じゃ、お邪魔しました。
女1 お邪魔されました。
女2 ……あの
女1 ……なんですやろ
女2 ……その
女1 ……はい、半身阪神ファンの田淵はん？
女2 最後に一つよろしいでしょうか？
女1 ええッ！
女2 それでは、今日こうしてお邪魔したのは、事件でしたでしょうか？
女1 多分、すべったダ洒落の過激さほどに。
女2 許容範囲だったでしょうか？
女1 それを強要しますか？
女2 貴方の教養の問題です。
女1 ハイ、中央アルプス千畳敷スキー場の大滑降です。
女2 おっしゃって。
女1 ほっておいても見事に滑りまくります。
女2 つかの間の退屈と、少しばかりの友愛に満ちた苛立ちを置いて帰ります。
女1 お別れですね。
女2 そんな嬉しそうな笑みを浮かべていわないのが、エーと、切符です。
女1 お別れですから、度を越して悲しみがこぼれているのです。
女2 大変よくわかります。が、仙ちゃん。あなたは、大阪のおばちゃんが、このまますんなり帰ると思っていますか。
女1 別れは、いつも、後ろ髪を引くものですから。
女2 掛布は髪ないで、どうなの、かわいそうやんか。
女1 寄る年波には勝てません。

女2 やはり、もう少し引っ張ってくれへんとそこに帰れません。
女1 あの、
女2 あの、
女1 ええ、
女2 あの、これその「ドンドン」のところに落ちてましたで。

女1は何もなかったかのように封書を受け取る。

女1 お別れですね。
女2 だから
女1 だから、本当に、お別れですね。
女2 忘却の彼方へかえりましょうか？それとも最後にキーを外して、中島みゆき歌いましょうか？
女1 いえ、あの、実は、くだらない心配が一つ、
女2 ええ、是非。
女1 あまりなので、人に聞いたことが、
女2 ええ、分かります。ハイッ！
女1 ある日、臨終間際の息も絶え絶えのおじいちゃんが家族を前に、医者の手を採っていいました。先生、二人のドラ息子が心配で心配で、死んでも死に切れまへんのや。
女2 心して聞いてます。
女1 医者がいいました。
女2 なんとかしたらなな。
女1 心肺停止です。
女2 だれが名付けたか・私には・別れうた唄いの・影がある……
女1 半身阪神ファンの田淵はん
女2 ほんとの最後に一つよろしいでしょうか？
女1 ええッ！
女2 それでは、今日こうしてお邪魔したのは、他でもありません。
女1 はい。
女2 意を決してお邪魔したんは、このスパイクでタップを切ってもらおうと思うてやってまいりましたんやで。
女1 最初から、何でそういわへんの。めちゃくちゃ回りくどいやん。
女2 ワープします。
女1 え？
女2 それ履かんということはないやろ。ワープでけへん。
女1 ハイハイ。

女1はスパイク(タップ)シューズを履く。

- 女2 ハイは一回やッ。
女1 ハイ！
女2 (ドンドンと叩く)これは！
女1 トントントンや
女2 耳掃除いつしたんや、おとといか？
女1 母さんお肩を、
女1 2 トントントン！
女2 お邪魔します、こんばんわ。半身阪神ファンの田淵です。ワープしました。
女1 半身阪神ファンの田淵はん？でそのハンシンハンシンは最初が阪神、それとも半身？
女2 ガキのつかいやないから、大阪のおばちゃんは気短いの知ってるやろ。
女1 ワープまでしてもろうたのに、えらい失礼しました。で、御用は？うち忙しいねんやわ。
女2 単刀直入にいいます。お宅は読売新聞ですか。それとも「希望の光」読んでもらえてますか。ついでに町内会費払いましたか、でなかったら、押し売りお断りて書いてもらわな、一応挨拶してしまいます。
女1 いまさら挨拶なんかええて。
女2 挨拶抜きなんて、結構友達になってますやんか。
女1 無理やりな。
女2 その無理ついでに、タップ踏んで。
女1 そら無理やわ。
女2 無理やりワープしてここまできたんや。いまさら無理とはおかしいやろ。やり。それとも、でけへんゆうのはあんた、まさかジャイアンツファンやないやろな。ジャイアンツファンはスパイクでタップ踏まれへんのや。
女1 ハイハイ

と、女1はタップダンス。

- 女2 息切れすなッ！なんな、そら無理やりやってんやん。いやいややん。だから、ゆうたやろ、せめて体は何があっても鍛えとかな、そうやろ、息切れすると、いやいやに見えてしまうやろ。

と、いうものの女1はタップを快適にリズムを刻む。

女1 無理やりやからそれでいいんやろ。

女2 あかんあかん。歌い。

笠置シヅ子『買物ブギー』流れる。

今日は朝から 私のお家は
てんやわんやの 大騒ぎ
盆と正月 一緒に来たよな
てんてこまいの 忙しさ
何がなんだか さっぱりわからず
どれがどれやら さっぱりわからず
何も聞かずに 飛んでは来たけど
何を買うやら どこで買うやら
それがごっちゃんに なりまして
わてほんまに よういわんわ わてほんまに よういわんわ

女1は歌いながらタップ。決まる。音楽の途中で、女2は、

女2 わてがほんまによういわんわ。一緒にいきましょ。

たまの日曜 サンデーというのに
何が因果（いんが）と 言うものか
こんなに沢山（たくさん） 買物たのまれ
人の迷惑 考えず
あるものないもの 手あたりしだいに
人の気持ちも 知らないで
わてほんまに よういわんわ わてほんまに よういわんわ

～略～

ちょっとおっさん こんにちは
ちょっとおっさん これなんぼ
おっさんいますか これなんぼ
おっさんおっさん これなんぼ
おっさんなんぼで なんぼがおっさん

おっさん おっさん おっさん おっさん×3
わてつんぼで 聞こえまへん
わてほんまに よういわんわ わてほんまに よういわんわ
あーしんど

作詞・作曲 / 服部良一

女1、2のタップ。決まる。

女1 ちゃうんちゃう。
女2 何が？息あげんやないッ！
女1 スパイクはいて、何で『買物ブギー』なん。いくらなんでも無理あるやん。
女2 無理が通れば道理が引っ込む。草履代わりのスパイクシューズが今、無理して頑張ってくれたんやない。
女1 周り近所から、苦情きても、そんなんや言い訳でけへんやん。
女2 スカッとしたやろ。ええやない。
女1 ちゃうやろ、スパイク履いて、歌うたうんなら、ええか、半身阪神ファンの田淵はんに向かっていうのも失礼ながら、なにはさておき『六甲おろし』やろ。
女2 よろしい。
女1 当然やん。
女2 おおいによろしい。じゃ、厚いご要望にお応えしてまいります。
女1 そうこなな、でも、道上洋三バージョンは止めてや。
女2 ごちゃごちゃいわん。
女1 風はこっちやな、(指をペロツで)田淵はん、浜風よーし。

と、女2は『六甲おろし』を弾く。女1はタップを踏み始める。女2、急にバンと鍵盤を叩いて止める。

女2 何で歌わんの？
女1 唇真一文字に結んで、風を切ってますから。
女2 そんなんやからあかんのや。
女1 えっ？
女2 いつもそうなん。あんたはやっぱ歌わんの。あたしはそやからと思います。だから、キンコンカンカンのキンコンカンカンも聞こえまへんのや。すぐそこに踏み切りあるやん。頑張ってや。何票差あると思ってますんや。上向いて、ボソボソと歌ってるかどうか解らんような、視線上に投げ上げてるんか、足元の芝生見てるかどうか解らんようで

は、もう情けのうなります。

女1 今度は、なに言い始めるつもり。

女2 仙ちゃん、ワープしたけど、うちらまだ、お知り合いになれたままやろ。もうすぐ友達やん。そやから分かるやろ。わてが何でこうしてお邪魔したか。無駄口たたきに來たんと訳がちゃいませ。

女1 半身阪神ファンの田淵はん。

女2 はいな、仙ちゃん。

女1 お知り合いとお友達はご近所ですか？

女2 半身阪神ファンと全身阪神ファンのほどには。

女1 お買い物ついでに、お邪魔していただいて、ありがとうおました。はよせんとお店締りますで。

女2 では仙ちゃん、しっかり歌ってください。そのマイクをつけて、しっかり歌ってください。そうして、得票6433、「レット・イット・ビィ」五票差で「六甲おろし」のこの五票差を逆転して下さい。不肖、明日は全身阪神ファンの田淵のおばちゃんは、必ずインターネット投票しますから。仙ちゃん、だから、がんばって歌ってください。あなたの歌声でみんなを元気づけてください。

女1 はい。

女2 貴方の独立する大阪の国語は関西語ですよ。

女1 はい。

女2 だから、カントリーソング（国歌）は『六甲おろし』です。

女1 はい。

女2 では失礼します。明日は全身阪神ファンの田淵のおばちゃんは、一言、そうお伝えしたかったのです。

女1 少しだけお知り合いになれた田淵はん。

女2 はい。

女1 それだけですか？

女2 練炭自殺誘いに來たと思いませんか。

女1 そのほうがましだったかも知れません。

女2 ぼちぼち失礼します。

女1 え？ウソー。

女2 仙ちゃん。うちらちょっとだけ、お知り合いになれたやろか？

女1 意を決してお邪魔したんは、このスパイクでタップを切ってもらおうと思ってやって來たんと違いますやろか。

女2 近所迷惑でっせ。

女1 最後に一つよろしいでしょうか？

女2 ええッ！

女1 キンコンカンカンのキンコンカンカンが浜風に乗って、聞こえそうな、そんな気がしますが、自信がもう少しもてません。

女2 『六甲おろし』を歌って。タップを踏んでみますか？

女1 ぜひ強引にっ！

女2 心の準備はッ！

女1 ハイ、今スパイクは中央アルプス千畳敷スキー場の大滑降の上です。

女2は『六甲おろし』を弾く。

六甲嵐（おろし）に颯爽と
蒼天（そうてん）翔ける日輪の
青春の覇気美（うるわ）しく
輝く我が名ぞ阪神タイガース
オウ、オウ、オウオウ
阪神タイガース
フレ、フレフレフレ

～略～

オウ、オウ、オウオウ
阪神タイガース
フレ、フレフレフレ

作詞 / 佐藤惣之助 作曲 / 古関裕而

女2が弾く曲に重なって、レコードの『六甲おろし』が流れる。この曲で女1、2はタップを踏む。

やがて女2退場。

女1は一人でタップを刻む。

『六甲おろし』消える。

静寂のなか、女1の息切れの「ゼーゼー、ハーハー」がやけにうら悲しく聞こえる。

[6 章]

静寂の中の女1の息切れの「ゼーゼー、ハーハー」はやがて、忍び笑いから、大笑いになる。時間にすれば、五分強ほど笑うことになる。その笑いは文楽の義太夫語りの、あのあきれ程長い笑いである。この笑いの中、音楽入る。タップシューズを脱ぐ。

女1 (笑い)わは、わーは、わーはは、わーっはあははは.....

女1は女2から受け取った封筒を開く。

女1ずいぶんにご無沙汰していますが、その後お変わりありませんか。お便りも出さずに今日まで来たのは、時間がなかったからでも、よだきかったからでも、貴方のことを忘れたからでもありません。ただ、あなたに近況をお知らせしても、ご迷惑かとおもい、今日まで失礼して来ました。ここで貴方は「なしかえ」、「どげんしてかえ」と訊くでしょうか。そう訊かれても、わたしの近況は、雨蛙がないち、雨が降るくらいで、たいしたできごとありません。隣の猫のたまが、うちの顔見ち欠伸をして外にでていくくらいです。大事件といえば、駅前のなんにもない通りに、オムライスしかないファミリーレストランができたくらいです。ためしに「小倉アイス」たのんでみましたら、やはりオムライスができました。きっと、明日からも何もなく、きっと幸せが続くでしょう。きっと明後日もです。それが不満ちゆうのではありません。(未完)

女2 (英語)Macbeth!

と橋掛かりで女2。いでたちは半身阪神ファンの応援グッズ一つ、郵便配達員の腰カバン、座布団二枚、買い物カゴで登場。女2は老女である。

女2 (英語)Your facc,my thane, is as a book where men

May read strange matters. To beguile the time,
Look like the time, bear welcom in your eye,
Your hand, your tongue. Look like th'innocent flower,
But be the serpend under't. He that's coming
Must be provided for; and you shall put
This night's great business into my dispatch,
Which shall to all our nights and days to come
Give solely sovereign sway and masterdom.

《マクベス夫人》ねえあなた、あなたのお顔はまるで本のように、だれの目にも怪しい内容を読みとられてしまう。世間を欺くのためには世間と同じ顔つきをして、目にも、手にも、口にも、歓迎の色を浮かべることですよ。みせかけは無邪気な花、でもその下には蛇を忍ばせる。せっかくお出向きのお方には、たっぷりご馳走しなくては。ねえ、今夜の大仕事を手早く片づけるのは、全部わたしにおまかせなさいな。首尾よくいけば、これから先に続く二人の長い昼と夜、

女1

가

가

가

《マクベス》やってしまっ、それで事が済むものなら、早くやってしまったほうがよい。暗殺の一網で万事が片付き、引き上げた手元に大きな宝が残るのなら、この一撃がすべてで、それだけで終わりになるものなら……あの世のことは頼まぬ。ただ時の浅瀬のこちら側で、それですべてが済むものなら、先行きのことなど、誰が構っておられるものか。(福田恒存・訳)

女1 2 (日本語)きれいは、穢い。穢いはきれい。さあ、飛んでいこう、霧のなか、汚れた空をかいくぐり。(福田恒存・訳)

.....

女2

(手話)叫び声が聞こえたようだった、「もう眠りはない、マクベスは眠りを殺した」----あの無心の眠り、心労のもつれた絹糸をときほぐしてくれる眠り、その日その日の生の終焉、つらい労働の後の沐浴、

傷ついた心の霊薬、大自然が用意した最大のご馳走、
人生の饗宴における最高の滋養----(小田島雄志・訳)

女1

(英語)That tend on mortal thoughts, unsex me here,
And fill me from the crown to the toe top-full
Of direst cruelty, Make thick my blood,
Stop up th'access and passage to remorse,
That no compunctious visitings of nature
Shake my fell purpose, nor keep peace between,
Th'effect and it. Come to my woman's breasts
And take my milk for gall, you murd'ring ministers,
Wherever in your sightless substances
You wait on nature's mischief. Come, thick night,
And pall thee in the dunnest smoke of hell,
That my keen knife see not the wound it makes,
Nor heaven peep through the blanket of the dark
To cry, 'Hold, hold!'

《マクベス夫人》かしく悪霊たち、今こそわたしを女でなくしておくれ、

私の全身になみなみと、頭の上から爪先まで、残忍と冷酷を漲らせておくれ、わたしの血をどろどろにして、憐れみに通ずる血の管を塞いでしまうのだよ、せっかくの恐ろしいもくろみに、良心の呵責などが揺さぶりに入って、なまじ実行を押しとどめることのないように。さあ人殺しの手先ども、わたしの乳房に取り付いて、甘い乳を苦い胆汁に変えておくれ、お前らは目に見えぬ姿のまま、この世の悪事という悪事に手を貸しているのだから。そしてたれこめた夜、お前は地獄のどす黒い死の煙を死人をくるむように厚く纏うのだよ、わたしの鋭い刃の切っ先がえくった傷口を見ないで澄むように、天が暗闇の帷の切れ目から覗き込んで、思わずこう叫んだりしないようにー「やめて、やめて」

女2

《マクベス》よし、決心はついた。そうとなったら全身の力を引きしぼってこの恐ろしい大仕事にとりかかろう。

さあ行こう、時を欺くのは美しい装い、
偽りの心中を隠すのは偽りの顔。

女1 (日本語)あの戸を叩く音は、どこだ? どうしたというのだ、音のするたびに、
びくびくしている? 何ということだ、この手は? ああ! 今にも自分の眼玉をくりぬきそう
な! 大海の水を傾けても、この血をきれいに洗い流せはしまい? ええ、だめだ、のたうつ
波も、この手をひたせば、紅一色、緑の大海原もたちまち朱と染まろう。(福田恒存・訳)

女2 (手話)ごめんなさい皆さん、
いつものことですよ。なんでもありません、
申し訳ないのはせっかくの楽しみを台なしにしてしまつて。(大場建治・訳)

女1 (英語)Avaunt and quit my sight! Let the earth hide thee!

Thy bones are marrowless, thy blood is cold;

Thou hast no speculation in those eyes

Which thou dost glare with.

What man dare, I dare;

Approach thou like the rugged Russian bear,

The armed rhinoceros, or th'Hyrcean tiger,

Take any shape but that, and my firm nerves

Shall never tremble. Or be alive again,

And dare me to the desert with thy sword;

If trembling I inhabit then, protest me

The baby of a girl. Hence, horrible shadow,

Unreal mock'ry, hence!

《マクベス》出て行け、消えろ! お前は土の中のものだ!

お前の骨に髄はなく、血は冷えきっている。

そうやって睨めつけているお前の目には

ものを見る力などないはずだ。

男にやれることならなんでもやってみせる。

毛むくじゃらなロシア熊の姿で出てこい、

角で武装した犀、ヒルカニアの虎、

いまのその姿でさえなければ、おれの筋肉は

微動だにするものか。生き返って戻ってきてもいいぞ、

それで剣を抜いて無人の荒野で決闘を挑んでみる、

少しでも震えるさまをみせたら、乳くさい小娘と

ふれて回るがいい、失せろ、恐怖の影法師、

存在しないまやかしの姿!

女2

が?

見えたとは何か？

女1 (日本語)マクベス、マクベス、マクベス。
マクベスはけっして滅びはせぬ、かのバーナムの森の樹が
ダンシネーンの丘に立つ彼に向かってくるまでは。(小田島雄志・訳)

女2 (手話)まだここにしみが。
消えておしまい、この忌まわしいしみ！消えろと言うのに！----一つ、二つ。さあ、いよいよやるべき時刻----なんて地獄は暗いだろう！----なんです。あなた、なんですか！軍人だというのに、恐れたりして！だれが知ろうと、恐れることがありまして！私たちの権力をとがめるものがありまして？！----それにしても思いもよらなかった、あの老人にあれほどの血があろうとは。(小田島雄志・訳)

女1 (英語)What is that noise?

女2

侍女たちの声のようです。

女1 (日本語)おれは恐怖の味を忘れてしまった。
以前には、夜の叫び声を聞けば
五感が凍りつき、恐ろしい話には
髪が命あるもののように総毛立った
ものだった。だが恐怖という恐怖をなめ尽したいま、
殺戮の思いに慣れ親しんだこの胸は、どんな悲惨にも
驚くということがない。(大場建治・訳)

女2 (手話)なんの騒ぎだ？

女1 (英語)What is that noise?

女2 (日本語)なんの騒ぎだ？

女1 (手話)なんの騒ぎだ？

女2 (英語)What is that noise?

女1

？

(ハングル)なんの騒ぎだ？

女1 2 なんの騒ぎだ？

女1 騒いでいるのは(と、女2を指差す).....

女2 あたし？

女1 そうや。

女2 そやないやろ、あんたのほうの声おおきおまっせ。

女1 はいはい。

女2 ハイは一回。

女1 はい。

女2 ところで夜遊びはどこな？門限過ぎてるやろ。ええ加減にしてもらわなな。

女1 失礼ですが.....

女2 ストップセンテンス。そのフレーズの後は聞き飽きた。「失礼しました。御見それいたしました。お許くださいませ、お代官さま」云々。お城も見えへんのに、そんな常套句(城東区)は、あのな、市内ならまだしも、河内なら何とする。

女1 結構がんばって、ついていっていますが、先見えへんのやけど。

女2 人生先見えてて、何の因果か応報か。語る世間に鬼がいて、救う仏も浮かばれる。そやろ、若造、素直にそやおいい。

女1 そかなと思うけど、ほんとは訳わからんやん。

女2 娘、素直にそやおいい。

女1 本当にそのとうりです。

女2 返す踵が軽すぎる。惜しいことしたな、次は生娘、素直にそやおいい、やったんやで。

女1 最近、無理はしませんのや。

女2 もう十分無理してるやないか。

女1 はは、人生、その通りでおます。

女2 ところで、この火盗改め鬼の平蔵最後にもう一度聞く。お加代、夜遊びときたら、火遊びとなるが、それに相違あるまい。

女1 はあ？

女2 この期に及んで、しらをきりやるか。火遊びを昼にして何とする。

女1 どうでもええけど、そういうことやないやろ。

女2 言うにことかいて、メザシを頼んだわたしはどうなんの。

女1 なんかいま、ごっつうホップした。

女2 昨日な、飲み屋でビールのあてにあてはメザシ頼んだんだス。オっちゃん、メザシ一つ頂戴。シラーや、二十四や。

女1 キビシーイ、六四、二十四で無視やな。

女2 解説すんやない。

女1 で！

女2 頭の髪の毛、黄色と黒に染め分けたオっちゃんが、視線メニューに投げやんの。しゃないから、思いっきり「優勝！」ゆうたった。

女1 バンザーイ！

女2 オっちゃん、声さらに張り上げて「優勝メザシ、一丁！」

女1 バンザーイ！.....まあまあや。貸してみて(と、女2の応援グッズを取り、着けて)、同じ店や。あてはよう分からんで、「三十一番」一つ頂戴、って頼んだんだ。たったの十円。

女2 掛布の背番号三十一。

女1 何出てきたと思いまっか。

女2 まさか？

女1 そのまさかですがナ。小鉢に入りきらへん、すき焼き用の大きな麩が一つ。どうせえゆうんや。そらまあ、歩は一兵卒で安うおますが、

女2 あのなあ、掛麩ゆうぐらいやから、なんか掛かってんやろ。

女1 はいな三十一番。そこでんがな。オッチャン小鉢手に持ち、あての頭見ました。髪の毛睨みました。青海苔しこたまパッパ、パッパ、パッパでハイお待ち。本物の掛布がきたらどないすんや、髪の毛ないで、青海苔振りかけへんてかい。

女2 そらないやろ。

女1 お坊さんが来たらどないすんや、禿やないぞ、髪の毛あんど、剃りあげてるだけやないか。

女2 ねえちゃん無茶ゆうたらあかんわ、そんな店あらへんやろ。鬘やったら、見抜いてパッ、てか。そんなことゆうたら、掛布はんおうじょうしまっせ。

女1 ほんまやて。

女2 ほんまやったら、うちのいうのもほんまや。火遊びときたら夜遊びになるやろ。で、薪をくべたのは誰や。

女1 薪くべた？何でここで焚き火の話しになるんや。

女2 この火盗改め鬼の平蔵を甘く見ると、痛い目を見るのは、お豊、その方やぞ。

女1 お豊？お加代から、お豊にいつなったん。もうすきにジャンプし。

女2 薪くべ、薪くべ、薪くべと、人身を煽り、国家転覆を企む輩は、その方に相違ないか！

女1 へえへえ、相違おます。

女2 この期に及んで二言を申すか。

女1 何のことかいっこうに。

女2 ええい、ならこれに見覚えがあろう。(と、甲電を出す)この訴状によると、夜毎「薪くべ、薪くべ、薪くべ、薪くべはけっして滅びはせぬ、バーナで森も焼き尽くせ」と、奇声が闇夜に響き、とある。お志乃、どうだ。二言はつけまい。

女1 それいうんなら「マクベス。マクベスはけっして滅びはせぬ、かのバーナムの森の樹が」や。めちゃくちゃ訛ってるやん。

女2 ついに吐いたか。どうや、少しは楽になったと思うが、全部吐いてまえ。えっ！そのバーナムの森とはどこの裏山のことや。

女1 マクベス、マクベスやて。

女2 発音悪いんちゃうか。

女1 マクベスッ！

女2 発音違いと温情を指し示したが、それもならぬとは強情なやつめ。

女1 ほんまやて、マクベスやて。

女2 ほんまほんまと、聞き飽きる。どこにほんまばかりつまってる人生がありま

すんや。そんなんや、成り立ちませんやろ。ええな、ウソも真の人生ならば、咲いてみせまひょ空花よりも美しく、騙る心は痘痕も笑窪の方便と、言えぬあの世は今日のうち。まいどまいどと会釈を預けて行過ぎる。ぼちぼちでんたと受けて流すは淀川で、流れて揺らめき舟を押す。もうまるで、まごうかたなき映して漂う白雲や、ないかいな。だからもう、風に柳と吹く身の上に、ほんまほんまと、いきせききって棹差すな。

女1　　なんやよう分からんが、無理してるのはようわかる、気がする、と思うわ、たぶん、そうやろ。

女2　　それや。

女1　　雰囲気は何とか分かるような、思いはなんとか、ここまで来るけど……

女2　　はっきりせんちゅうこっちゃ。

女1　　まあ、

女2　　ほんまかどうかわからんちゅうことやろ。

女1　　そうやな。

女2　　やっと吐く気になったか。では素直に申すがよい。薪くべる裏山とはどこや。

女1　　マクベス。

女2　　ああ、パーや。なけなしの韻を踏んでまで苦労したんや。

女1　　マクベスはどうゆうてもマクベスやろ。

女2　　二度も三度もまったく、シェイクスピア翁の作なることぐらいい、知ってるわい。この火盗改め鬼の平蔵、何度も甘く見る巾着袋だ。(と、巾着袋を出す) どうだ。この巾着袋を、ただの巾着袋と思うなよ。ほれ、ここのこれ切ったら、どうなるか知らへんぞ。ならぬ堪忍、するが堪忍、それでも余る堪忍は、この巾着の中に入れてもろうてきましたんや。どや！

女1　　やめてェ！

女2　　やめてやと、ねえちゃん余裕やないか。

女1　　あほらし、やめて以外なにゆうん。あほちゃうん。

女2　　あんたそれはゆい過ぎや。人聞き悪いやないか。

女1　　もう我慢でけへん。黙って聞いているだけやと思わんといてや。

女2　　あまりの展開に、頭にきたな。頭突っ込んで、そんなとこに入るんかい。巾着袋放りばなしで、ほっぼいてどこに行く気や。このネタどうするん。

女1　　ワイワイ、どや、どや。どや、どうする。(と、箆笥から靴下を出す)

女2　　ようまあ、そんな都昆布、箆笥に隠してたこっちゃ。

女1　　あのな、おばちゃん、これどうしたら都昆布に見えるん。

女2　　ブラブラ振ってみ。ほら、そんな箆笥預金はない。

女1　　箆笥預金やない。見てのとおり絹の靴下や。シルクや。

女2　　夏木マリがどうしましたんや。

女1　　ごちゃごちゃいわん。闇夜に、絹を裂くよな女の悲鳴や！

女2 ついに奥の手出してから、自分で出されへんのやろ。悔しかったら、自分で出してみてみい。

女1 ええんやな。

女2 そんなもったいないこと止めとき。あたしが出したる。家でやと、なんなと使い道あるやろ。な、そうし。

女1 女が一旦、下着出したんや。もう止めれん。人生一度は、絹を裂くよな女の悲鳴の例えより、ホンマもんさせてもらいます。さあ、どのくらいの高周波でいきましょか。ご要望におこたえさしてもらいます。

女2 もう好きにせえ。

女1 この高周波、電磁層まで届けと、思いのたけで参ります。ホントに、参ります。

女2 またホントいいよったッ！あかん、あかんて、そこまでうちに隠し弾だせゆうんやな。よろしおます。ご期待にお応えしまひよ。

女1 勘違いしてるやん。持って行くところ間違ごうてる。品評会してるんちゃうんやで。

女2 どや(と、買い物籠から絹ごし豆腐をだす)。

女1 どやとはどや。

女2 絹は絹でも絹ごし豆腐や。おそれ入れ。

女1 恐れ入りました。絹の靴下に、絹ごし豆腐を、てらいなく差し出す、その発想と勇氣に恐れ入りました。

女2 一言多い。

女1 わかった。あれや、つまり、それはその、おばちゃん家の、明日の朝の味噌汁の具や。その豆腐さぞ名のある絹ごし豆腐やろなあ。さすがやねえ。どこで買うのん。ひょっとして、大豆よりニガリが超一級品ちゃうん。当たりやろ、当たったやろ。隣近所とは訳がちゃいます。海洋深層水からの恵み「にがり靖国」。

女2 お園、おばちゃんの特技を教えようか。

女1 結構ですよやけど。

女2 遠慮いたすでないない。

女1 めっそもおまへん。

女2 長らくお邪魔したのう。もうすぐ失礼をいたす。さて、何を隠そう、わたしの特技はこの豆腐の角で、頭をカチ割ることさ。できるなら、ひとこと、ついにひとこと「あ、痛い」と叫びたいのさ。畳のメを汚すが、堪えてつかあさいよ。マイ、フレンド、救急車はいりまへんで。

女1 何考えてん。

女2 色々、一杯。

女1 ちゃうやん、そんな豆腐の角で、頭をカチ割ってやで、どうなんのや。そらまるで、あれやん、つまり、その、変人以上やん。

女2 天才か？

女1 すんなり言えたら、ゆうがな、つまり、だから、分かるやろ。ええいクッソ。

女2 わかるで。

女1 苦しいとこや。

女2 手話でいい。

女1 手話やとええんか？なにゆうとん。

女2 なにゆうとんとは、なにゆうとん。辞書はどないすんや。あらええんかい。そんな區別はないやろ。

女1 ああもう、構え方の問題や。

女2 しゃないな。英語で手えうっときや。

女1 そういう問題やないゆうとんやん。

女2 わからん子やな、そんなことゆうとクレージーキャッツはどないすん。植木等はまだ生きてますんや。悪うおました、すんまへん、解散します、なんぞゆうてしまへん。

女1 なに引っかけまわしてんや！

女2 だからッ、思い切れッ！どうや、こうして無心にこの柔肌の一点に目をやると、身もだえすんやろ。その身もだえを思い切らなあかんのや。見てみなはれ、このなんともいえん、三次元のコーナー。人生そのものやなあ。互いに九〇度でガップリ四つや、いやガップリ三つのミステリアストライアングル。身動きとれまへんのや。身震いしてしょうない。行き場を失い、引くに引かれず立ちすくむ。人生やなあ。涙やなあ。笑いやなあ。情念が渦巻いてるなあ。ゆうに言われず、涙した朝もあつたはずや。わかるで、ようわかる。泣くに泣かれず涙をかんで、こぼす笑顔がほろ苦い。思わず叫びたい瞬間もある。そらそうや。そうやろ。なそうやろ。

女1 なにゆうてん。豆腐の角の他愛もない話しを、面白おかしくすんのも、ほどほどにして、はよなんとかし。

女2 山折哲雄はんかてゆうてるんや。日本近代の壮士節は、山田晋平に引きつがれ、古賀メロディーによって甘くささやかれたが、その情念はついに美空ひばりによって完成された。これが演歌や。わたしの身もだえを、ついに思い切る、この思い切るのが情念や。情念はやがて語りを呼ぶ。そうして、この他愛もなく見えるかもしれない、切ない人生が、身震いする語りによって浄化されんや。いわく言いがたいはかなさよ、例えようもないものあわれよ。わたしの愛してやまぬ無常よ、いでよ。そうしてすべてを語りつくせ。(間) なんかいえ。

女1 すんなり言えたら、ゆうがな、つまり、だから、分かるやろ。ええいクッソ。

女2 ここまで持ってきたんや。今日こそなんとかせえ。あんさんが今日用意した、絹の靴下は宵闇の水面に映る満月や。

女1 そんなことあらへん。あたしの高周波は電磁層を突きぬけ、満天の煌く星座へ乱反射のごとく交信をかわすのです。電波の赴くままに……

女2 水面に映る満月は石投げたらおわりや。
女1 (ついに、買い物籠を漁る。意を決して買い物籠を掲げる)でも。でも、でも...
...
女2 なにしてん。
女1 これは大阪のおばちゃんの買い物籠ですか。
女2 そうやトム。
女1 まじめに。
女2 このまじめなおばちゃんを捕まえて、なにゆうん。
女1 では生真面目に。これは大阪のおばちゃんの買い物籠ですか。
女2 そうや。大阪のおばちゃんはその籠持つからこそ、大阪のおばちゃんは大阪のおばちゃんなのか、その籠が大阪のおばちゃんを仕立ててるのか、籠が属性か、大阪のおばちゃんが属性か、それは、華やかな、長い、それでいてあつかましい、栄光の大阪のおばちゃん史の暗部に隠れ、後先ありません。
女1 では、いわばこれは大阪のおばちゃんそのものですね。
女2 まっこと、御意。
女1 そんな大阪のおばちゃんの懐から、取りい出だしますは、これ、「黄金のゾウリ」であります。どうですか。
女2 あんさん、お国は？
女1 河内です。
女2 そこでは、薄揚げさん「黄金のゾウリ」ゆうん。
女1 いいえ。
女2 でまかせゆうたらあかんわ。
女1 常光寺界限向こう三軒両隣では、小さい頃から「金のぞうり」と言いました。
女2 そんなアホな、笑われまっせ。河内音頭16ビートで踊られへんて。
女1 常光寺の本尊は地蔵菩薩です。お稲荷さんではありまへん。お揚げさんはお供えできまへん。そこで、南北朝時代の御世の昔から、お地蔵さんのお御足を守るため、この「金のぞうり」をお供えするのです。
女2 ヘー、ようできた、ホントのようなはなしやな。
女1 いま、ホントといいましたね。
女2 えっ？
女1 そんな返し文句は、「黄金のゾウリ」のまえでは、からっきしです。

女1は女2の左手に「黄金のゾウリ」を置く。

女1 さあ、絹ごし豆腐に「金のぞうり」を履かしてください。
女2 ナンセンス。

女1 センスがないのはおばちゃんの発想です。

女2 どうなっても知らんで。厚揚げならまだしも、巾着になって、お餅に成済ました絹ごし豆腐が鰹出汁に染まるなら、ああ、やっと帰れたその巾着の、堪忍袋の緒を切るが、それを承知でええんやな。

女1 覚悟の上です。

女2 それでは参ります。マイ、フレンド、畳のメを汚すが、堪えてつかあさいよ。

女1 自信があります。今夜はそんな気がしてます。絹の靴下から、突拍子もなく呼び出して、てらいなく差し出す、勇気に満ちた絹ごし豆腐の情念を頂けたら、そいつにのしをつけてお返しできるかも知れません。

女2 南無八幡、えべっさん。お願いしまっせ、メリケンはんッ！

と同時に、女2はすばやく左手の薄揚げを、右手の絹ごし豆腐に重ねる。続いて同時に、両手の天地を逆転。下から左手、薄揚げ、絹ごし豆腐となる。女2は左手を掲げている。

同時に、音楽。

女1 見てください。それが「黄金のゾウリ」です。絹ごし豆腐が「黄金のゾウリ」を履いているのです。最高やないですか。それこそ、ついに美空ひばりの向こうにたち現れたれた、もう一つの演歌の可能性の姿です。今絹ごし豆腐は情念と化し、身もだえしながら思い切ろうとしています。

女2 えっ、ウソー。

女1 大阪のおばちゃんには見えへんのですか？

女2 見えるとか見えんとか、そんなお話しやないやろ。大阪のおばちゃんはこので感じるから、それで十分や。

女1 そうです。よくできました。

女2 ありがとさん。

女1 できるなら、ブルルンと、少しだけブルルンと、震度3.5でブルルンとッ

女2 ブルルンッ！どうや？

何も動かない。

女1 もう少し強く。

女2 あいわかりました。それではブルルン！

女1 ブルルン！

女1 2 ブルブル、ブルルン！

ここでブルルンと動いたのは、女1と2であった。

女1 さあ、身もだえをふん切って、思い切ります。マグニチュード7.1で

同時に、音楽。

女1 2 ブルブル、ブルルン！

今度は、絹ごし豆腐がブルルンと動く。

女2 ブルルンやで、ブルルンや！

女1 おばちゃん、思い切った！

女2 身動きとれまへん。身震いしてしょうない。

女1 身震いしているのは「黄金のゾウリ」を履いた絹ごし豆腐です。

女2 なんともならん。

女1 そうです。おばちゃんの思い切りと絹ごし豆腐の身もだえがブルルンです。

女2 ブルルン！

女1 語り始めましたか。笑っていますか？

女2 こんなん、人目には可笑しかろう。だが、自分では笑われへんわい。

女1 では泣いているのですか。

女2 どっちか言えば泣きたい気分や。

女1 泣いてください。

女2は泣く。それは文楽の義太夫語りの、あのあきれ程ためた泣き
でいある。

女1 お待たせしました。豆腐の角で、頭をカチ割るのは、今です。

女2 (絶叫で、豆腐の角での頭のカチ割り)！

音楽、カットアウト。

女2 あ、あ……

女1 見えますか。

女2 何が？

女1 大阪城が、バーナムの森が、優勝パレードが、倒壊した高速道路が……

女2 あ、あ、あ……あかん。痛ない。豆腐の角が欠けてもた。

女1 聞こえますか。

女2 何が？

女1 それは、つまり、踏み切りの音が、カントリーソングが……

女2 キャーッ！ウソ、なにこれ、ツーと伝わるこの冷たいもん。

女1 えっ？

女2 何ということだ、この手は？ああ！今にも自分の眼玉をくりぬきそうな！大海の水を傾けても、この血をきれいに洗い流せはしまい？(と、豆腐の雫をペロリ)

女1 情念みせて、もっと語り！

女2 優勝メザシ！

女1 なんなんそれは？

女2 分かった。単純やん、出会いがしらはあかんわな。この買物籠持つの忘れるとは、まあ何とおこがましい。不遜でありました。まったく失礼小金治。

女1 なにゆうてますん。これ大阪城やろ。感じたやろ。バーナムの森が動くんなら、大阪城かて動くゆうたんはあんたやろ。

女2 これ大阪城なん、何となんと(南都雄二)。大阪城が黄金のぞうり履いてんの。

女1 ……おばちゃんあんた、違う言い切れるん。

女2 ひえー！

女1 語の真の意味で、違うと論証できるん。

女2 ひえー！、それは詭弁やん。

女1 詭弁を逆手にとって、それは大阪城でおます。

女2 そんなんゆうたら、この黄金のぞうりの上に鎮座ましますと、あたいがトマトを載せると、これはトマトであって、すでにトマトでなくなるのでしょうか。トマトソースでもいいのですね。すると、絹ごし豆腐はいつ大阪城になったのでしょうか？

女1 それは戻り値なしの詭弁のブラックボックスです。

女2 三度、ひえー！するとついにこの黄金のぞうりは変数ですか？変数値が日本だとすると、それは日本であって、すでに日本ではないのですね。思わず標準語してしまいましたが、それは大阪であって、すでに大阪でないのですね。これはそんなソースコードでありましたんですか？

女1 オープンソースの自己責任。

女2 そんなことゆうたって。

女1 だからゆうたんや。

女2 ゆうたかもしれんなあ。

女1 ゆうたことになったんや。

女2 ゆう、ゆう、ゆうて、そこまでも一度銭湯なら。ならそらゆうだけやろ。

女1 天神祭りの宵宮に……

女2 天神祭り？

女1 あてがな、菅原道真はんお迎えに上がり、お旅所にお御連れする、御迎船の舳先のお迎人形やったころ、大川の水面に映る大阪城はものごつつう綺麗やったなあ。ところが大阪城はん、水面でゆらゆら揺らめくだけやないんや。御迎船動くやろ、すると大阪城はんも、一緒に来るんや。そんなあほなことあるかいて、奉安船に、供奉船にも、奉拝船にも聞いてみたんや。するとみんな、大阪城はんご一緒に、後ろきてはりまっせと、口をそろえてこともなげにいいよる。驚くには驚いたが、大阪城はんもお供をすとは、さすがは天神祭りや、船渡御やと感心したもんや。

女2 そう思うたのは、あてだけやおまへんで。氏子総代、浴衣仕立てでお参りに来ていたみんなかて、そうやったと。

女1 通天閣かてゆうた。

女2 なら、水面の上に、なけなしのわずかな思いを投げて、川底見上げた夜空に、あんたはいったいどんな星を出したんや。。

女1 パーナムの森が動くんなら、大阪城かて動くと。

女2 確かにゆうた。ゆうたことになるんやろうな。

女1 そんな、それは無責任やん。

女2 オープンソースは、自己責任はあるが、あんたへの責任あらへんわい。

女1 もてあそんだな。

女2 もてあそばれたな。

女1 それでも大阪城は動く。

女2 そうや、アイスピック代わりにカチ割り氷作ったこの頭が、豆腐の角で、カチ割れたら、きっとなんでもみえるやろうと、あんたに大見得切ったのは、この大阪のおばちゃんや。

女1 でもあてには見えへんのや。

女2 バーナーで焼きつくすんは大阪城か？

女1 そうやな、なくなるんやから、動いたのかも知れまへん。

女2 お忍っ、ついに吐いたな。

女1 もうええて。火盗改め鬼の平蔵受け継いで、今夜はいつもと違って、とっておきの絹の靴下で、あんたの十八番の絹ごし豆腐を導き出しました。そんな絹ごし豆腐に「黄金のゾウリ」を履かせることができたのは、修行のたまもの、それもこれも大阪のおばちゃんのおかげであります。感謝申します。申しますが、動かへなんだ。

女2 お仙っ！

女1 ……

女2 仙ちゃん！

女1 なんですか、半身阪神ファンの田淵はんっ！

女2 ちゃいます。半身阪神ファンの田淵は、半信半疑の田淵でもありましたが、ご無沙汰している間に、全身全霊の田淵となりました。

女1 それでは、全身全霊の田淵はん。
女2 はい仙ちゃん、何ですか？
女1 プルプル、プルルン！はなぜだめだったのですか？
女2 それはお応えできまへん。環境が違います。
女1 環境？
女2 仙ちゃん！自己責任でやってみますか。
女1 自己責任で！
女2 あなたの真摯な姿勢は認めます。だから、今日もまた「あ、痛い」といえへんかったこの全身全霊の田淵に成り代わり、一言「あ、痛い」とゆうてみまへんか。
女1 まいどです。
女2 では参ります。不肖この全身全霊の田淵、音頭とります。よろしいか。
女1 お願いします。
女2 ええー、さてこの場の皆様へえー、ちょいと出ました私は、お見かけどおりの若輩で、ヨーホイ、ア、エンヤコラセー、ドコイショ……
女1 はよせえ。
女2 黄金のゾウリ、お履かせください。行けーッ！

と同時に、女1は新しく買い物籠から出して用意していた左手の薄揚げを、右手の絹ごし豆腐に重ねる。続いて同時に、両手の天地を逆転。下から左手、薄揚げ、絹ごし豆腐となる。女1は左手を掲げている。

女1 いかがでしょうか。
女2 まあ、そこそこではないかと。
女1 では、プルプル、プルルン！行きます。
女2 まって！
女1 え？
女2 右手に何か？
女1 記憶の向こうに！忘れ去れぬ憤怒をッ。
女2 これにし(と、イカリソースの瓶を渡す)
女1 これは。
女2 クラスや、継承し。
女1 意味わかりまへん。
女2 人生わからんかことはしこたまあります。いちち、すべてわかったら、細木数子の商売上がったや。
女1 イカリ、ソースですね。
女2 色々あるやろ。肝心なのは、プルルンで体ゆすったらあかん。揺するのは絹ご

し豆腐。あんたの体動いたら、その瓶の中身が動くからすぐ分かる。ええな。

女1 はい。一つええですか。

女2 何ね、仙ちゃん！

女1 見てくれはいかがでしょうか。

女2 あんた何に拘ってるん。

女1 視線に晒されるこの想像力は、コミカルですか。それとも、そこそこ絵になっていきますやろか。

女2 知らん。だれも見てへん。でもな、世間のみなさまには訊かんとき、黙るとき。いろんな誤解を生んでもしょうないで。とりあえずその自意識には笑顔で応えとき。

女1 無矛盾ではないのですね？

女2 豆腐にソースは、矛盾ではないわな。少々の違和で、二の足踏むわな。

女1 少々の違和感に耐えて見せます。

女2 仙ちゃん！あんたなんか文句あんのやろ。それでもごちゃごちゃゆわん。

女1 はい、こうなったらこの身もだえを、黄金のゾウリを履いた絹ごし豆腐に送ります。そんな身もだえを豆腐の中で、プルルンと揺らめかせてごらんに入れましょう。プルルンにプルルンを増長させ、臨界点のその瞬間、絹ごし豆腐が思い切ったその瞬間を見切りましょう。それは豆腐の角に、この頭を預けた瞬間です。見事、絹ごし豆腐の角で、この頭カチわってご覧にいれましょう。そのとき私の情念は「あ、痛い」と語るのです。

女2 今の仙ちゃんなら、きっと出来る。

女1 全身全霊の田淵はん、それでは自己責任で参ります。

女2 お供します。

女1 (間)プルルン！

と、音楽。女1は豆腐の角に頭をぶつつける。

女2 プルプル、プルルン！

と、女2も豆腐の角に頭をぶつつけた。

女1 あ……

女2 あ、あ

女1 あ、あ、あ……

女2 仙ちゃん！

女2はすでに豆腐から頭を離している。

女2 頑張らんかワレ！
女1 あーっ！
女2 ……
女1 あい、あい……
女2 聞こえん。もっと大きな声で！
女1 あい、あいッ！
女2 愛では地球救われん。「あい」たや、「た」た抜きすんやない。あいた、で血を流せ。
女1 出来るなら、「た」が出ぬ悔しさで額の上から血の涙を流したいほどです。
女2 仙ちゃんそれや。まだ、その絹ごし豆腐、額から離すんやない。いま仙チャンは身もだえしてますんや。静かにそっと、てらいなく絹ごし豆腐に思いをはせてみて。聞こえるやろ、絹ごし豆腐の呟きが。聞こえるはずや。それを、あんたの口で語っておあげ。絹ごし豆腐の身もだえを浄化してあげな。あんたしか、でけしまへんのや。ここでて行きたいんやろ。おさらばして、独立すんやろ。畳のメともおさらばや。だれぞ迎えに行くんやろ。
女1 全身全霊の田淵のおばちゃん。
女2 目えつむるんやないで。
女1 全身全霊の田淵はん！……国家とは。
女2 なんやて、こんな時になにてんごゆうてんや。笑われへんて、そんなギャグ。そんなのは死語やろ。
女1 死語のようなギャグに付き合ってきたんはあたいや。国家とは！
女2 後藤！それはあたいの台詞や。しっかりしい。
女1 あんたの口癖、物まねしただけや。なんか知らんが、今のうちなら応えられる気するわ。いつものようにがまんするから、やって。
女2 知らん。
女1 お別れすんのが怖いんか？もうこうして二十年も三十年も付き合ってきたんやから、これが潮時やろ。
女2 なに意地はってんや。畳のメ、そのテーブルの下残ってんで。あんたには重とって一人で動かされんやったんやろ。知ってんで。ズーと「一緒に動かして」て言いそびれてきたの知ってんで。おみとうしやて。
女1 それでも、ホンマモンやって。
女2 ホンマ、ホンマとゆうんやない。国家が、国家足りうる骨格としての属性とは。
女1 一つとして軍隊。
女2 さらに！
女1 一つとして貨幣。
女2 さらに！

女1 一つとして権力。これらの鉄扉面を剥ぐとそこには恐怖という二文字が静かに眠っている。これをロマンという。

女2 ……模範的な解答ありがとうおました。どんな本読むとそんな骨董品みたいな、呪文に出会うんだす。天牛にかてそんな古本もうないで。

女1 なんか息苦しいわ。

女2 後藤！

女1 なんだすやろ、全身全霊の田淵はん。

女2 仙ちゃん、そんなんや大阪城は動かへん。

女1 誰も、動くと思うてへんがな。わかってるて。もうええて。やっぱり、「あ」で、「い」やったんやて。

女2 そんなもん、軽くうちやって、軽やかにジャンプすんや。

女1 軽くうちやって、軽やかにジャンプ……

女1はガクリと崩れ落ちる。ソース、絹ごし豆腐、薄揚げはそのまま。
この女1の「ガクリ」と同時にオルゴールの音静かに入る。

女2 そうや、軽やかにうちやってな、ジャンプせなな。琴ヶ浜の内掛けを見事にかわして、大見得切ってもええで。そうすると、バーナムの森が動いたくらいやから、大阪城かて軽く動くやろ。そら動かんかったら、あんたの方から、近づいてったり。なにゆうてんや。詭弁やあらへん。動くというのは運動の問題やあらへん。相対的な位置の問題やから、距離がちじんだゆうんは、関係が変化したということだっせ。それが動くゆうことだ。しかしやな、この奥の手使うと、後先わからんなので、結果を保証でけへんゆうんが、なんともならんところで、人にはよう勧めんのやけど、それでもかまんゆうなら、そらもうあんさんの勝手だすさかいにな。ようは、あんじょう気張ってもらわなならんとううことですわな。

オルゴールがやけに物悲しく聞こえる。

[7 章]

オルゴールの中、女1、2はそのまま居る。

女2　　もしもし、どないしましたんや。こんなところで居眠りして、風邪ひきまっせ。しっかりしなはれ。

女1　　……

女2　　まあまあ、そらなんだ。手の上に御揚げと冷奴載せて、まさか、あんさんその口ん中にお味噌入れてんやないやろな。こらまた、あんさん家のお味噌汁の出汁はソースですかいな。そう、ソースなんどという駄洒落は、辺見まり。それともイタ飯系。

女1　　……

女2　　なんなん、その変に尊敬した眼差しは。

女1　　おはようさんで。どちらさんですやろ。

女2　　はいおはようさん----ではありまへん。まだ日越してまへんで。

女1　　で、御用は？

女2　　いや、そう直球投げられても。いや、見るからに、ダイエット成功したんやなて。スリムになったやん。何キ口落ちたん。

女1　　七キ口。

女2　　ウソこけ、ごまかせるんなら、こんばんわ。

女1　　どちらさんですやろ。

女2　　桂伝兵衛。

女1　　え？どちらの？

女2　　桂ときたら、NPO 落語会の伝兵衛や。それくらいは分かるやろ。その伝兵衛がきたんや。ラーメンもってきたとでも思うたかい。

女1　　まいど。

女2　　オイド。

女1　　もうかりまっか。

女2　　マッカリは鶴橋でっせ。まあ、ぼちぼちでんな。

女1　　ようお越しいただきまして。

女2　　眠たい眼で礼いわれたない。

女1 おや、伝さん、まあおあがり。ささ、こっちすわんなはれ。相も変わらずブラブラ遊んでるっちゅうやないか。それはいかんで。そいで今日の用向きは。おや、手土産に饅頭持ってきてくれたとは、下心がありそで、なさそで、ウッフン。というてもまあ、あたしは、ウニも大トロも嫌いなので、どうしよもなりまへんな。とゆうてもせっかくや、すまんが伝さん、そこの手水鉢とってもらいまひよか。

女2 意気込みはあるよやけど、「饅頭怖い」と「手水鉢」一緒にやっては、それではどんならんやろ。しよないな。まあ、お座り。稽古つけまひよ。

女1 よろしゅう、おたのもうします。

女2 何やいな、おまはん。もう忘れたんかいな。お弟子連れてくんやないから、まず座るまえにその座布団返さんかいな。お客さんに、気を新たにしてもらうんやな。

女1 こら、えらい、えらいすんまへん。

女2 コラコラ、手前に返さんかい。お客はん追い帰すんかい、むこうに埃まうことになるやろ。

女1 こらまた、重ね重ね、えろうすんまへん。

女2 侘びだけは一人前になってからに、気ィつけなはれや。

女1 へーい！

女2 で、どういう具合やったんかな。

女1 へい、あてはどうも、枕ゆうのがにがてでおます。これをなんとかマスターして、そこそこなしたいと、そう思うてます。

女2 で、その枕の後に演劇落語、舞踊落語、スポーツ落語、架空落語、文学落語、喧嘩落語、シュールリアリズムス落語、チャット落語のどれやりたいんや。

女1 こらまた、えらい仰山おますんやな。

女2 嗜好性の話をしてんやがな。

女1 いえいえ、枕ゆうても、色気の話とちやいます。

女2 なにゆうてん。

女1 めっそうもおまへん。その上、伝兵衛師匠にネタでお手を煩わしては、さらに申し訳おまへん。出来ますんなら、この枕ふりで一流になりたい、こう思うとります。

女2 そんな落語があるかい。あるんなら、修学旅行ぐらいや。

女1 その心は.....

女2 枕投げは、まあ大目にみましよう。

女1 今の出来は上中下でいいますと、

女2 なんやと、その突っ込みはオーバーランやぞ。

女1 何をおっしゃいますか。言い過ぎでも行き過ぎでもおまへん。さすがやなあて、上方落語界でも、今の切りかえし、瞬時にはなかなか、国宝級やて思いましたんや。

女2 ほう、そか。まあ、それほどでもないでー。

女1 謙遜も一流でおますなあ。

女2 そか、そかそか。で、枕そこそこなすとはどの程度や。
女1 どういたしますか、そこそこでおますよって、それをどの程度やゆうと、これまた……
女2 そんなんや、枕抱えて討ち死にやど。なんなといいようがあるやろ。頭打って考えんかい、そやろ。
女1 へえ、
女2 ほなゆうてみ。
女1 こうまあ、座らしてもろうて、客つかむなりいじるなり……
女2 そんないじるなんちゅう、下品があるかい。
女1 こら、失礼おます。その枕の話芸を、語りの中に昇華させとうおますんや。
女2 で
女1 枕中で語りつくそう思うとりますんやが……
女2 それがどうなんや。
女1 いやそらまあ、ハッキリしたことは申しあげれんのですが、こう座布団がフワフワと飛ぶんやないかと。
女2 なんの話しや。
女1 へい、
女2 そら、いやまあ、ハイばかりゆうて、屁こいてんとちゃうど。
女1 へい、いや、ちょっと座布団動かしてよろしおますやろか。
女2 なんなと好きにせい。
女1 ありがとおます。

と、女1は座布団をテーブルの上に置く。そこに座る。

女1 えー、お忙しいなかのお運びをいただき、毎度の古い話で失礼します。きょうは、話によっては、このテーブルが空を飛ぶという、これまた飛んでるのに飛んでもないという一席をお聞き願います。でもまあなんですな、ポツポツ、年の瀬になりますんで、わたしだけでっしゃるか、なんとう気ぜわしいなります。早いもんで……
女2 こら待たんかい。急に始めんやない。出囃子はどないしたんや。そこまで手え抜くこたないやろ。
女1 こらまた失礼しました。おーい仙公、ちょいと手を貸せ。仙公、師匠がお呼びだ。仕事だ、手あけて顔だしてくれ。
女2 お前さん、だれ呼んでますんや。
女1 へい、都合のいい同居人がおりまして、手伝わせますんで、少々お待ちを。仙ちゃん、急いでくれ、師匠お待ちかねだ。仙ちゃん！
女2 なにゆうとんや、さいぜんより誰も見かけませんがな。ええからあんさん、

やり。

女1 あいにく道具がおまへんさかいに……

女2 口でええがな。

女1 口三味線で。

女2 かまん、かまん。朝丸のでもやっつけ。

女1 へい。

女2 はい、それでは座布団返しました。

女1は出離子の口三味線を始める

女1と女2はそれぞれ座布団を返す。女2は袖からの出の動き。さて女1は口三味線をしながら、箆笥を開けて羽織を出して着る。この羽織、女2が阪神タイガースの応援グッズとして使っていた、片割れである。

女2 えー、お忙しいなかのお運びをいただき、毎度の古い話で失礼いたします。きょうは、話によっては、このテーブルが空を飛ぶという、これまた飛んでるのに飛んでもないという一席をお聞き願います。でもまあなんですな、ポツポツ、年の瀬になりますんで、わたしだけでっしゃるか、なんとこのう気ぜわしいになります。早いもんでんな。正月三日はそう前やなかったように思います。歳とるほどに一年が早くなりますんで、昨日が正月やったんじゃないかと勘違いするお方もおりますやろな。こうなりますと、お年玉、毎日あげんならんわけで、羽根突きの玉と同じで、お年玉落とす暇あらしまへん。

女1 まあ、これは冗談ですな。冗談で済ませられへんのが、歳をとりますと、一日がいつまでたっても終わらん方も出てまいります。朝起きてご飯済ませますんやけど、昼時になりますとやはり腹すいてきますんやろ……

女2 ばあさんや、朝飯まだか？

女1 なにゆうてますんや。さっき食べたやおまへんか。

女2 ほうか、わしは食べたと思うとった。

女1 またてんごゆうてからに、食べた、ゆうてますやろ。

女2 そうやったなあ。やっぱり食べたのに食べへんかったか。

女1 えー、これを落語界ではゲーデルの不完全性定理・朝飯バージョンと申しますんですが、ここに赤の他人が入りまして、このお二人には無矛盾なものですから、どちらが正しかということ証明できないんでありますな。こうなると、証明できないということ証明してしまうという、何といたしますんか、反科学的な結論になりますな、厚生省がお手上げしてしまいよりましたんですわ。福祉行政の対象が行方不明になりましたもんやから、パンクしました。怖いもんですなあ。落語家の枕の二言三言で、天下の一省庁が解体してしまいましたんでおます。まあ、時の政府も面子がありますんで、いまでは厚

生労働省と名前を変え、失地回復にいそしんでおると、人づてに聞いておます。これは極秘情報でおますんで、内緒にしておいていただきたいと、まあ、こう思うとります。

女2 すんまへん、そこのおばちゃん、冗談でおます。

女1 というのも冗談でおます。

女2 というのも反冗談なんで、そんなにあせると、株失敗しまっせ。

女1 まあこれに比べて、冗談になりまへんのが、上方の演劇の世界ですな。あれは軟弱でいけまへん。

女2 ほー、こらまた過激なお言葉。

女1 訳分からんのは、始末におえません。

女2 まったく話のネタにもなりまへん。

女1 ニコッとする方もござりまひょうが、声が大きかったら台詞が通ると思ってい
る輩が多すぎます。また、間が悪いと間尺なくだめ出しする演出も居まして、まったく間
の抜けた話で、いいようが、あれはありませなんだ。

女2 まア！

女1 特に、テント芝居とゆうのが----奥さんこの世の中にはそういうものもありま
すんですわ、これがもうどうもこうもいいようがありまへんですわ。お芝居を、こらもう
完璧に肉体労働と勘違いしてます。汗かきゃいいというもんでありまへんわな。

女2 奥歯に苦虫挟んでゆうてんか。ズバツとゆうたらんかい。

女1 幟が風に揺れてまして、よう見えなんだけど「未知」とか「小」とかいう字が
ちらちらしとりましたわ。あら、吹き飛ばされんちがいますかな。

女2 そら「未知座小劇場」ゆうとことちゃうか？ホントかどうか知らんで。

女1 難儀なことにこれが、来年、数年ぶりに、テントで芝居するゆいはじめよりま
してな、関係者が難儀しとるゆうのを、聞いとります。

女2 も一つ難儀なことに、俳優をオーディションで決めるゆうことで----

女1 それはあかんやろ。他人を巻き込んだらあかんやろ。

女2 まもなく日時決めるゆうとりましたで。

女1 とはいうものの、

女2 まあそれもこれも、

女1 2 来年の話でおますんで、鬼が笑うて、へそで茶沸かします。

女1 2

と、女2はここで、阪神タイガース応援グッズの羽織を、高座の落語家よろしく脱ぐことになる。が、途中まで。

女1 ヘーそ.....

女2 こら待てワレ、おまんの実力からしてその「ヘーそ」の返しは、一昨日は眼え

つぶろう。でもやなあ、ここで羽織を脱がんかい。あたしゃ、のんびんだらりと羽織脱ぐやつは、もうなんちゅうか、信じられまへんのや。ここ、ここやろ。枕もキリついたとこや。ここで脱がんなら最後まで脱くな、

女1 へい。

女2 はよ脱げ。

女1 師匠、お言葉を返すようになりますが.....

女2 なんや、脱がへんちゅうんやな。

女1 これはあたいのトレードマークですよって、脱ぐちゅうのはなんともはや。

女2 あんさん何様や。

女1 いつものように、純正阪神ファンの田淵だす。

女2 田淵はん。それは分かってますがな。

女1 ほんじゃ、なんでっしゃろ師匠。

女2 純正阪神ファンの田淵はん！.....

女1 はい。

女2あい分かった。わてが脱ぐ。

と、女2はここで羽織を脱ぐ。たたむ。箆笥に仕舞う。それは女1が羽織を出したところである。

女1 いやその、いかがですやろ。枕並べて討ち死に、という具合にはまいりまへんやろか。落語が、枕で始まり、枕で終わる。そんな語りで、このテーブルを、見事飛ばしてみたいと.....

女2 豚もおだてりゃ木に登る。役者はんは舞台上で空を飛ぶ.....いいますわな。ま、ええやろ、やってみせてもらいまひょか。そんで、もしもの並べる枕は、用意してんのかい。

女1 はい、そらもう。

女2 ほー、こらまた用意だけはええやないか。

女1 これでおます。(と、箆笥から林檎を一つ出す)

女2 なんやこりゃ。これが枕か？

女1 林檎でおます。

女2 見たままやないか。返す言葉に利子はつけなはれ。

女1 いまは、一つのただの、見たままの林檎でおますが、これが二つになったり、姿を変えたり。

女2 あんさん、落語家が手品しょうちゅうんかい？

女1 いや、タネや仕掛けはないんでおます。

女2 田淵はん、それはな、あんたのゆうてんのは魔法や。

女1 人智の及ぶ話しでして……
女2 田淵のおばちゃん、あんさんの話は、まったく要領をえまへん。つまりこの林檎が----
女1 空を飛びます。
女2 手品でもなく、魔法でもなく。
女1 はい。
女1 2 ……
女2 やってもらいまひよ。
女1 ありがとおます。稽古よろしゅう願います。
女2 でけへん。あたしに出来るのは、ここで聞かしてもらうだけや。気兼ねのう、しっかり気張りなはれ。
女1 肝に命じて。
女2 田淵はん、その林檎なあ、枕になったら、やめてもらいまっせ。いや、枕ならそれでええんやないか。まあええ、討ち死に覚悟でいきなはれ。
女1 はい。

と、女1はテーブルの座布団に座る。ワイヤレスマイクをつける。

女1 参ります。CQ、CQCQ！

と、音楽入る。

女1 CQ、CQ こちら7MH、出力5ワツ、試験電波発信中、JE3……いやコールサインはありません。メリット5で極めてクリアな方、特にメリット1の混信中のあなた、タヌキなどやめて発信願います。
てなことを二十年前はやっていましたが、いまは貴方も、私も片手で出来るネットラジオです。ネットラジオ局の開局時間が、今夜もやってきました。全世界の視聴者の皆さん。お元気でしたか？お変わりありませんでしたでしょうか。相変わらずの騒がしいシャンブーで、いや石鹸で、いやいや世間で、ホイホイホイ、快調のオヤジギャグ三段論法とばして、相変わらずのわたくしです。それでは、独断と偏見で選ぶ、田淵はんのお気に入りチャットのコーナー。まずは、チャットネーム大阪の後藤さんから。なにになに、独立しました。遊びに来てね。パスポートもビザもいりまへん、そこんところヨロシクッ！どうやら海外結婚で日本を脱出する模様ーです。ウソー、独立しましたが、国ではありません。わたくし後藤は、日本から独立した世界市民です。日本語表記住所、大阪府大阪市。皆さんも気軽に独立してね～エ。……
こら後藤、もっと詳しく説明しろ。

それではもう一つ。イギリス沖の北海、シーランド公国からのチャット。ハイハイ、わが国の国土は海の上、バスケットボールのコート程度、1967年9月2日に独立してからズーと快適よ。モジョ使えるようにしようかな？独立記念パーティするよ。P2Pよ。こらわれ勝手にハイハイハイ。

おっと、後藤はん、イラッシャイ～。なにになに、もっと気楽に……国家とは、一つとして軍隊……

と、ガリガリキーと混線音。

女2 CQ、CQ……こちら7MH、出力5㍑、試験電波発信中、JE3……いやコールサインはありません。

女1 ブレイク、ブレイク。混線、混線やて。

と、混線音やむ。この後、混線が起こり止む。

女1 少々焼け気味の田淵のおばちゃんです。面倒くさいんで音声チャットに切り替えます。登録IDお持ちの方、もうバンバンきて、バンバン。

お相手くるまで、こちらから。ミチミチ道ちゃん聞いてますか。

女2 CQ、CQ……こちら7MH、出力5㍑、試験電波発信中、JE3……いやコールサインはありません。……五尺七寸……いまだ出会わぬ多くの人々へ、来る日を夢見て試験電波を発信します。CQ、CQこちら7MH、出力5㍑、試験電波発信中、JE3……いやコールサインはありません----

女1 後藤ちゃんですよ。聞こえてますか？途中でメンゴ、それは一つとして貨幣…
…一つとして権力、これらの鉄扉面を剥くとそこには恐怖という二文字が静かに眠っている。これをロマンという。言葉を変えれば恐怖とは情報のことですよ。ですから気楽に…

…

女2 クリアー5、いやクリアー1、このメッセージをメッセージ下さい。星座の煌く乱反射にも似て、電波の赴くままに、メッセージ下さい

女1 ……わたしは今日まで生きてきました。一回コッキリの生しか生きることしかできないながら、だがそれを、決して他人とは取替えのできない固有の理由で。あなたもまた、そのようにして大いなる流れの中で、美しい沈黙……それはあたかも、いまこのように漆黒の闇に閉ざされながらも（天空高く一本の指を大らかに突き上げる）ひとたび天空高く舞い上がればそこは満点の煌く星座、数え切れぬ星の輝きがあると信じられるほどの確かな思いを込めた沈黙……そのような美しい沈黙を秘めてきたのであろうと、わたしは今、そんなあなたに想いを馳せます。そこではあなたはきっと、十全に孤立し、自由に食べ、十二分にクソをし、そして考えて生活している個人でありたかったのだと確信しま

す。ですからあなたは、勇気に徹しぬく諦念を、孤独という寂寞を、ものの憐れという憐憫をこそ、美しい沈黙に秘めさせなければならなかったであろうと推察します。ときあたかも、大いなる流れのなかで美しい沈黙を秘め、なおその美しい沈黙に、勇気と孤独とものの憐れを、あらかじめ名付けることを諦観してしまったロマンとして秘めることで、二重の秘め事を秘めてしまったもの言わぬ、それは大いなる流れではなかったのでしょうか。だが、いえだからこそわたしはあなたに宣告します。もう帰るべきロマンはないのだと、美しい沈黙と引き換えに、帰るべきロマンの通路は取り払われてしまったのだと。未だ命名されず無名性の中で佇む美しい憂愁の沈黙よ、大いなる流れとはかくもしたたかであります。

……

だから、気楽にジャンプ。そして静かに一言「独立します」。これですべてが始まります。

女2 大阪のおばちゃん聞こえますか。

女1 毎度！

女2 オイド！で、それで、あの、そのやな……

女1 なんやねん。

女2 大阪城、動きましたか。

女1 ホイ、ガタンゴトンヤ。

女2 田淵はん、大阪城空飛びましたか？

女1 あんさん、そら環状線に乗ってみなはれ。

女2 またこの勿体つけて、腐りませ。

女1 はいはい。

女2 はいは一回。

女1 一二三で眼つむりなはれ。行きませ。一、二、三！

と、音楽大きくなった。

女1 どや。

女2 待ち。

女1 どやて。

女2 あんた、聞きたいんか。

女1 別に。

女2 ほな、止めとくわ。

女1 イケズすんやない。

女2 そやな、

女1 ふん、

女2 まあ、これは言わずが華や！

女12 (笑い).....

混線の音。

女2 ところで今日やる。

女1 何が？

女2 ああ、しらばっくれて。インターネット投票や。締め切り今日やん。結果でたんやる。聞かせて。

女1 それでは、全世界の視聴者の皆さん、お待たせしました。あなたの、あなたの、そしてあなたの待ちに待った、発表の時間です。ファンファーレ。

女2 え？(と、ファンファーレ).....

女1 集計結果第四位6431、河内音頭「河内十人斬り」、第三位6433「レット・イット・ビィ」。

女2 ヨッシャー！来た来た。浜風に乗って来い。

女1 第二位6440、「六甲おろし」。

女2 なんなん、途中経過ではなかったやつが一位になったんか。そら可笑しいで。

女1 え、ここでお知らせします。この第二位の「六甲おろし」、その健闘を称え、わが国の応援歌と決定しました。

女2 ヨッシャー！ヨッシャー！

女1 では、栄えある一位、カントリーソングの発表です。

女2 (と、ファンファーレ).....

この女2のファンファーレの中、音楽と混線音が大きくなる。女1の発表曲が聞こえない。また音楽等元に戻る。

女1(手話で「ヘイ・ジュード」と言わざるをえなかった)

女2 拍手！

女1 それでは.....

女2 あのな、この曲、ポールの曲やる。著作権あんのんとちゃうん。つまり国家行事のたびに著作権経費発生することになりまっせ。大きな財政負担やで。(と、演奏の準備)

女1 それは大丈夫や。亡くなった日から数える、著作権切れの期日は、明日でちょうどになります。

女2 そう。

女1 それでは国家斉唱をして、今夜のネットラジオを終わります。ではシーユー・アゲイン！さようなら、グッバイ、またね、再見、ティアーモ、ティアーモ、ティアーモー(手話で「さようなら」、ハングルで、広東語で、イタリア語で、フランス語で、ドイツ

語で、スペイン語で……語等々と続く)ティアーモ、ティアーモ、ティアーモー

女12は歌う。

なあジュード、悪くとるんじゃない
悲しい歌だってマシにできる
あの娘を心の中に受け入れることだ、そうすればいい方向に踏み出せる

なあジュード、恐れるんじゃない
出て行ってあの娘をものにするのがお前の使命だ
あの娘の心をしっかりつかんだら、いい方向に踏み出せるさ

苦しいときはいいかいジュード、いつもいつも耐えることはない
世界を一人で背負う必要はないだ
お前にもよくわかっているだろう、
クールにやって自分の世界を冷たくしている奴がどんなにバカか

「<http://lamuda.hp.infoseek.co.jp/heyjude.html>」から

一番が終わるころレコード「ヘイ・ジュード」が入る。林檎にライト
が絞られる。

この中、女12は退場。

レコードの二番に差しかかって、音楽カットアウト。

と、同時に上から枕がドサと落ちる。場が明るくなる。

と、同時にレコード音大きくなる。やがて「枕」と「林檎」に光絞ら
れる。

音楽の中、やがて暗転。

幕

[8 章]

[あとがき]

久しぶりに台本のこのスペースに文字を置くことになる。心情としては、久しぶりという感じはまったくない。何かが持続しているか、そう装うか、事実はまったく違うのか、今のところ定かではない。さし迫られてする整理にゆだねることにしたい。

さて、ご多分にもれず、この台本はパソコンのエディタで起こした。

ワープロソフトを使わなくなって久しいが、縦書きのできるエディタになかなか出会えず、MacのエディタからWindowsの「秀丸」等々渡り歩き、今回はシェアウェアの「QX」で仕上げた。縦書きのできるエディタはいくつかあったが、この「QX」が馴染んだということになった。また、目論見としては、音声入力で台本を仕上げる、というのも掲げたのだが、これは環境設定がままならず中途で挫折の憂き目をみてしまった。

これらはさておき、台本執筆にワープロソフトやエディタを利用するようになって困りつづけたことは、編集履歴が思うように残せないことであった。こまめに別版でバックアップを行えばいいのであるが、やはりついつい、保存は上書き保存となり、細部の編集履歴は残りにくい。つまりは、意思や、試行の経緯がみえないのである。これを何とかしたいということも、今回の目論見であった。

試行錯誤の結果、LinuxでCVS（バージョン管理システム）サーバをたて、WindowsからCVSクライアントアプリケーション・WinCVSで話をするという、台本のためのCVS環境構築をおこなった。これは見事に成果をみた。台本の各版は二百数十ほど版を重ね、これらのすべての変更編集比較を可能とした。

細部の報告はここでは割愛するが、大阪演劇情報センターでは、こ

これらのシステムサーバ環境を、演劇関係者に無料で利用していただけるようにした。機会があり、希望であれば試していただくことは可能です。また、今回の私の台本書きをシュミレーションとするなら、本格利用の準備は整ったことになる。詳細はご連絡ください。

あとがきを借りて、二三報告しておきたい。

今回の企画『大阪物語』は、来年（2006年）のテント公演を明確に射程した一環として位置付けられている。ありていにいえば、この展開の中で、テント公演の展望が理論的にも人的、経済的にも出せるのかどうかということである。この経緯での『大阪物語』である。

また、この公演は『鹿狩道三追悼公演』と銘打っている。

鹿狩道三は新潟の演劇人であった。われわれ未知座小劇場のテント公演に数回の出演があた。無理をいって迷惑をかけたか、楽しく遊んだ。享年四十三歳、若くして逝った。昨年のことであった。

ここに居る私は『大阪物語』を書くということが、どう追悼たりうるのか、という枷をはめることとなった。これは、彼とともにわれわれが抱えていたであろう演劇的課題を、歩一歩進めることになるのだが、彼が独自に、その現場で抱えていたであろう演劇的課題を、となるとそれには自信がない。ただわれわれが、彼とともに幻視していたであろう演劇的課題に対し、幾ばくかの、今はまだ定かではない仮説を、提示できたのではないかとする。そのような少しばかりの自負を、やがて打ち碎かれることもあるだろうが、この文章を読んでいただいているあなたと、いまは亡き鹿狩道三に、静かに差し出そうと思う。

私事になるが、これはべつに奇をてらったのではなく、ペンネームを「闇黒光」、演出名を「河野明」とした。この事態はすでに「闇黒光」が成立した初期の意志に戻ったに過ぎない。それは「闇黒光」が個人のペンネームではなく、台本執筆者の表象であった、というのが経緯である。たまたま他の方が、使う機会がなかった、ということになってしまったのであった。思えば、この表象が想起されたのは三十数年前、埴谷雄高の『闇のなかの黒い馬』が出版され、近くの踏み切りで女子大生の投身自殺があった、その日のクラブハウスの情景は、今でも記憶のなかで明瞭である。

余談は幾多あるが、要は演出の責任性をこれまでと違った形で、明瞭化してみるということである。今後はこれでいくことにしました。

最後に、台本の原稿用紙の升目を埋めている最中に、左記の引用文を、関係者に送る事態になった。よりよく書いて送ることが出来なか

った。制限字数が百二十字なのに千二百字と思い込んで書き始め、極端に縮小したりもした。この「あとがき」をかり、めめしくも今となって修正しようというわけである。左がその提出した文の引用である。正確には百二十字と千二百字の中間に位置したものである。

『演技について』

-- 大日本演劇大系『大阪物語』にそって --

演技について想うとき未知座小劇場では、物語について考えること、それは行為することのリアリティーへと通じる錯誤に思いをはせることになる、という縛りの中にあるが、これらの仮説はやはり架設であるので、ここ『大阪物語』では次のように命題化することにした。

無駄は演劇嘗為たりうるか？

言うまでもなく、ここには「無駄なことをしても意味がない」や、また「他にやることがあるではないか」といった思いが隠されている。これを近代主義的な発想として切り捨てることは容易いが、文化云々はさておき「演劇とは大いなる無駄である」ということはふまえるしかないであろう。

で、試行されるのは標準語の「関西語」化と、国歌の「レッツ・イツビー」と「六甲おろし」の選択決定である。

こうして『大阪物語』の幕はあがる。

この文に立ち入ると、迷路にはまるので、違う「大日本演劇大系『大阪物語』にそって」をメモ風に書き留めることで補足としたい。

私はこれまでの自身の台本を、大鉦を振るってその世界をみると、ベケットの『ゴドーを待ちながら』のウラジミールとエストラゴンの世界に視線を置いたように思う、としよう。で、今回の『大阪物語』で初めて、ついに現れなかった、ゴドーの側に視点を置いたように思われる、としよう。

この文を綴りながらの、一般化の誘惑を受け入れてしまうが、つまりベケットの『ゴドーを待ちながら』の「ゴドー」を観念とすると、それは「希望」であったりまた「情報」等々であったりする。これは、作品論として、まあ置いておきたい。だが、『ゴドーを待ちながら』をマンガ----とりあえず「マンガ」と言っておきます----として読むと

「ゴドーさん事故にあって間に合わなかったんだ」等々となる。これを類型化すると、

行くにいけないゴドーさん
行く気のなかったゴドーさん
自分をゴドーさんと思っていないゴドーさん

これらのいずれにも興味が尽きない。が、最悪は「ウラジミールとエストラゴン」がゴドーさんと思っていないゴドーさん、という究極を、置く場合である。までに止めておくのが幸せである。仮に
をメビウスの輪だ、ゲーデルの不完全性定理だといひ始めると、もう収集がつかないのぢやになる。いやになるが、興味が尽きないのでこれまたいやになる。

『大阪物語』ではゴドーは大阪のおばちゃんとなった。十年前なら、まったく違った大阪のおばちゃんになっていただろう。いや、大阪のおばちゃんではなかった、というのが正確だろう。

もちろん、このように設定して台本の執筆をしたわけではない。最後の「幕」という字を置いた時点での事である。明日になれば、きっと様子も変わるというところでの話しである。そのようなことなので、ここでいう「大錠」を「いいかげん」としていただくこと幸いこのうえない。

で、この思いのブレをなんとかするために、以下の自身の文章を、資料として記載することで、ここでいう重ねての補足である「あとがき」を閉じたい。

なお、この拙文も同じく、台本執筆中のものであった。

最後に、筆を置くまえに、種明かしをひとつ、と言うべきか、少々、自嘲の感を免れ得ないと黙視してきた「コンポジション 16」について若干。もちろん抽象絵画の祖といわれるカンジンスキーのコンポジションからの引用である。引用といえは実におこがましい。カンジンスキーのコンポジションという作品は、No,15 まで書きつがれたとするなら、その、16 が『大阪物語』であるとする、ほとんど身のほど知るための、ささやかな決意である。それはまた「大日本演劇大系」としてのマニフェストである。『大阪物語』をカンジンスキー論として展開できる日の来ることを、祈りつつ…… (2005.08.20 記)

[添付資料]

『演技について ~無観客試合と演劇~』

1 「無観客試合」の形容矛盾

演劇公演の舞台を、テレビ録画などで観ることがある。多くは『劇場への招待』とかいった番組なのだが、そこでは舞台を観るという感覚を捨て去ることを思う。これらの番組の多くは、当然のことではあるが、ある企画と意図によって、任意の部分が選択され、切り取られて、編集されたものである。この無観客試合は、それはそれである。

今ひとつの無観客試合を、テレビで観戦。タイで行われたW杯アジア予選、日本×北朝鮮戦のテレビ中継なのだが、この私の観戦という位置は、国際サッカー連盟（FIFA）によるのだけれども、無観客試合なので、いくらテレビで観戦していても、やはり私は観客ではないことになる。この事態からすると、観客とは試合会場にいる観衆のことになる。語の意味を予断すると、試合を衆目にさらさないことが、無観客試合と思われるが、背に腹は変えられず、あるいは、中継契約を解約できなかったのかも知れない。北朝鮮での試合チケットを予約していた人たちは、キャンセルの憂き目を見たのか。ともあれ、テレビの前で、ライブ中継がフレームで切り取られた全体であったとしても、私は観衆であった。

私は、といいながらもこの事態の経緯を、何もわかっていない。そして知らない。第三国で行うのは、ホームでやるはずだった、北朝鮮への制裁なのか。同時に、試合終了後の選手たちが危害が加えられるかもしれない事態を、それは「北朝鮮での観客暴徒化を理由に、ワールドカップ（W杯）アジア最終予選の日本×北朝鮮戦を第三国、無観客で開催するとした処分」であるなら、北朝鮮の観客に対するペナルティのツケを北朝鮮サッカー側が被ったのか。さらに、であるなら日本サッカー協会と、当日、サッカー場で観戦しようと予定していた人々が、割をくったということになる。ではこのような事態を招聘したFIFAは、どのような自己責任処分を自身に課したのか？処分を断行することが

そうなのか。

まあ、いってしまえば、これらのことはどうでもいいことだ。私が引っかけたことは、無観客試合という言葉の形容矛盾だ。この言葉の成立する前提は、試合という概念に、観客が含まれているからにほかならない。それは「観客試合」という言葉がないほどにである。にもかかわらず、無観客という形態で、試合を形容する。つまり試合でないものを試合とってしまう、自己矛盾がこの形容矛盾の本質だ。語の正意から行けば、無観客試合という言葉は成立しないのであり、仮にそのような形態があったとしても、すでにそれは試合ではない、ということである。多分、試合という言葉か、観客という言葉が曖昧であるのか、概念そのものをずらさざるをえない状況にわれわれはいるのだろう。

2 観客と試合と

さてお断りしたいが、私はここで観客論を開陳しようとしているのではない。観客という言葉を整理しようとしているに過ぎない。したがって、次のように「無観客試合」を整理したとしても、ここで綴ろうとすることは残る。

国際サッカー連盟（FIFA）の規律委員会の決定は、再びの事態を避けることであり、それは日本人選手と日本から訪れるであろう観客らへの安全性の配慮、つまりはW杯アジア予選での不慮の事故に対する配慮等なのだろうが、結果、これをなぜ「無観客試合」と表現するのか、ということになる。

閑話休題。どうも持ち場が違うところに迷い込みそうである。私は、スポーツ選手でも、スポーツイベント屋でもない。ましてや、武道を志すものでもない。舞台表現を志すものであり、その思想性が、抜き差しならぬものであるなら、それを由とするものです。いわば、単なる門外漢である。そこで「観客」という言葉を手がかりに、見えないものを、この際見ておこうとするには、徒手空拳で進みすぎるように思われる。

実は、この私の発言には経過がある。

かつてJリーグが発足間もないころ、あるクラブチームが破綻するなどし、観客動員が落ち込んだ時期があった。このとき当時のチェアマンであった川淵某が、正確ではないが「選手はがんばってもっといい試合をしないとだめだ...」とのインタビューコメントがテレビニュースで流れていたのを記憶する。この発言を舞台に置き換えてみよう。

「面白い舞台であれば客は入る」

これは間違いではなく、正解だ。だが、何もいっていないに等しい。「面白い舞台であれば客は入る」とは、それはそれで当たり前のことであり、だからといって無制限に観客数が増加するのではないからだ。「いい」や「面白い」は、ある価値観の表出である。ついには個的な嗜好だ。個的な嗜好が情報として力を持つには、生活圏を離れてはない。私が言うまでもないが、この個的な嗜好が生活圏を離れ、つまり幻影化するには、マスという媒体や、メディアが必要だろう。したがって「面白い舞台であれば客は入る」という物言いは、生活圏での話しであり、ここにマスコミュニケーションの浸透度により、その生活圏は広がるのであろうが、やはり、口コミという交通形態を逸脱しない。

だからこうも言うことができる。個的な嗜好が生活圏を離れ、つまり幻影化することによって、個的な嗜好が操作可能となるなら、

「面白くない舞台でも客は入る」

これは論理的帰結となる。また、それが継続するかどうかは別問題で、本質論とは別に、イベント屋の力量と、ビジネスモデルに帰結するだろう。

すでにお分かりのように「選手はがんばってもっといい試合をしないとだめだ……」とは、川淵某の無責任な、責任放棄の発言に他ならない。それが、現場への叱咤激励の発言だったとしても、事態の起因を選手たちに求め、責任回避を図ったとなるほかない。百歩譲ったとして、ではチェアマンとは何者なのだ。

現場経験もないので、選手という言葉を持ち出すのはやめよう。つまり俳優は舞台上、いい舞台をしよう、面白い演技をしよう、あるいはダメにしようなどという、そのような即時性を展開するのみの余裕はありません。やらなければいけないことは、そんなことをうっちゃり、通り抜けて山ほどある。

さて、この論理破綻を回避したものを日韓共催W杯だということができるのだろうか。定かではないが、私にはそのように見える。これをだれが支えたのか私にはわからない。また位置づける立場にない。それでもこうして今、私は「無観客試合」という言葉に向き合っている。

出発は「観客」と「試合」という言葉が並列する違和から、無観客試合という言葉は形容矛盾だだとする思いから出発している。私の力量で、ここでスポーツの何たるか、試合の語源等を紐解き、この私の違和に迫ることはできない。舞台とうい作業場に足を置き、生活感覚を押し開くことだけだ。

さて、スポーツと試合はいつのころから手を取り合ったのだろうか。近代日本の国威高揚として西洋式肉体強化術云々となると、稿数がいくらあっても足りない。違う語り口をしよう。

私は試合という言葉、どこまでたどることができるのか。果し合い状。宮本武蔵。決闘。どうやらこのあたりだ。死合い、間合いを試す、死を合わせる。こういうイメージが成立してくる。仮に、何の根拠もなく、武道の世界では命のやり取りを試合という、たとえば、私の語感に重なる。そうであるのかどうかは別として、つまり試合という語含意は個的なのだ。決闘は1対多でもイメージできる。これが集団的になると合戦となる。さてあたかも、試合が死合いに重なるとしているが、そうではない。天覧試合、御前試合などとなるとすべては死合いに重ならない。ここで一貫しているのは勝負ということである。それは死合いを含んで、生き死にの問題であったのだろうということだ。これが私の位置づけである。

さて、命をやり取りする試合に、われわれはどのように加担することができるのだろうか。多分、その事態に立ちすくむしかないだろう。これは野次馬ということだ。野次馬以外には立会人がありえる。また、助太刀人もありえる。こうなると、観客の出自は、試合に対する立会人なのだろうか、助太刀人、野次馬なのか？

たしか、黒澤明の姿三四郎と試合をした月形龍之介たちは、吹きすさぶ未明の荒野で絵になっていたように……記憶の彼方です。

命のやり取りを語り継ぐようにあった立会人は、審判になったように思われる。助太刀人が観客だ。野次馬はついに野次馬で、第三者で責任の埒外だ。もうほとんど私の悪意は audience は audacious や audio に通じる。

ここで、やっとサポータという言葉にたどり着いたことになるが、この言葉はいまだになじめない。私の直訳ではサポータは助太刀人だ。ましてやサポータは十二人目の選手といわれると、観客たろうとしている私は困ってしまわざるをえない。

甲子園球場には観客もサポータもいない。阪神ファンがいるだけだ。

ともあれ、日本式の命のやり取りの試合から、死合を抜き去った、仕合をスポーツに重ねることで試合はゲームになった。そこでやり取りされるのは勝負だ。これがとりあえず整理して差し出すことのできる私の独断と偏見だ。

さてもう一つ、古代ローマの円形劇場には剣闘士がいた。これは娯楽性の高い見世物だが、元は葬儀であったとももの本にはある。そこには市民という観客がいる。儀式だ。

勧進相撲も神社や仏閣で行われた儀式だ。大衆という観客がいる。

最後にギリシャ悲劇にはコロスが登場する。コロスは「舞台と観客との間の媒介者」としている。

試合という言葉にこだわりながら、観客というイメージをすくい上げようとすると、このように多義にわたる。ここで言う野次馬からコロスまでに共通す

る立場は、当事者ではないということである。

さてさて、ここまでの無理に無理を重ねた、論拠も示さない独断と偏見は当然のように行き詰るわけで、次のように命題らしきものを掲げ、文意を運ぶことにしよう。

サポータはどこに行ったのか？

日本×北朝鮮戦のテレビ中継画面から、こぼれ聞こえる太鼓と応援コールの中にいたのか。いや、あれこそ感動的にも、任意の第三者たらんことを選択したにもかかわらず、拒絶された観客と呼ばれたはずの一群ではなかったのか。どう考えてみても、F I F Aが無観客試合ということで、ゲートの外に押しやったのは、あの一群であったと思われる。だが、テレビ中継中のアナウンサーや、解説者、あるいはサッカー関係者の発言を総合すると、彼らはサポーターに変身したり、また観客になったりしてしまうのだ。ついには「日本全国のテレビで応援していただいたサポーターのみなさん」まで登場する。

ここまでくるとわけがわからず、納得するにはサポーター＝観客と理解するしかない。しかしこれは「無観客試合」ではなかったのか。

するとF I F Aは「無観客試合」ということで、押しやったものとは、何なのか？ほとんどもう、何かを押しやるように装うことで保障したのは、F I F Aの権威だけだ、などと与太を飛ばしたくなる。

もちろんこんなことを綴るために、文意を運んでいるわけではない。しかし一つだけ言っておきたい事は「サポーター＝観客は十二人目の選手だ」という、あたかも本質に迫るかのようなメッセージは、なんら内実を持っていなかったということである。つまり日本サッカー協会は「十二人目の選手」がいない試合などありえない、とはしなかった。選手のいない試合などありえないにもかかわらず、である。あたかも本質に迫るかのようなメッセージを保障するためのポーズすらしなかったのではないか。その証左に、重ねて不思議であったのは、誰もが「無観客試合」など試合ではないという意味が組織された、と思わないではないか。ここまでくると、F I F Aの「無観客試合」を素直に受け入れたというのではなく、サポータと呼ばれる側にサポータはいなかったといわざるを得ない。するとサポータとはクラブチームを、無償で真摯に支えようとする、ファンたちのことだと、これまた言わざるを得なくなる。

この事態を、語彙や形態を含めて混乱しているというのは容易い。そのようにあるなら、やがて整理されるだろうとなるからだ。リアリストを装えば、整理されるなら、とっくの昔に整理されているはずだ、となる。つまり、このあたかも一見混乱と見える現状こそ、整理されているのだ。この仮設が私の違和と結びつく。違和であるから合理的ではないとならないから、ややこしい。

つまり、そもそもは「無観客試合」という言葉を発したとたん、観客という

概念を含意しなかった「試合」という言葉に、観客がへばりついてしまうのだ。「無観客試合」という言葉がそれほどの力を持っているというのではない。むしろ「試合」という概念が、そのとき捻じ曲げられたことによるのだ。それは「試合」という文化が照らし出されたというほうが正解であろう。つまり、本来的には「試合」という概念に、「観客」という概念が含意されなかったのにもかかわらず、現代の私たちの想いが、「試合」という言葉に「観客」を預けてしまわざるを得ないねじれからくる、歪みの磁場が、一瞬、見通しのいい荒野に連れ出されたのである。もちろん、語源としてここで言う意味で「試合」があったのかどうかではなく、現代のわたしたちにとっての「試合」の語源がそう捏造されているということである。

さて、ここまで「試合」という言葉への思い入れを持つと、F I F Aはこれにどのような言葉を使ったのかが、気になってきた。The Japan Times OnlineのThe Associated Press (A P通信) によると「with no spectators」という文字が見える。ここでは「観客」に「audience」ではなく「spectators」を使っていることがわかる。この状態をF I F Aは「behind closed doors」(非公開ということだろう) という言葉を用いている。これらはインターネット上の検索サイトで調べたもので、F I F Aのオフィシャルサイトを覗いたりもしたが、規約委員会の公式文章に直接あたったのではないことをお断りしておきたい。ちなみに、ニュース記事では「試合」という語に「match」や「game」が当てられている。さらにお断りしたいがF I F Aの公用語が英語かどうか調べてはいない。これは余談になるが「spectators」の近似値として「specter」に目がいくこととなった。

3 真剣勝負

ようやく表現の鳥羽口に立つことができた、といえるが、やはり次に移る前に「試合」に対して決めうちを綴っておくしかないようである。

私たちは現在生活の中で「真剣勝負」という言葉を持っている。気軽に使ったりもする。私の個人的な言語観から行くと、いつのころ捏造されたのであろうか、と考えてしまう。このトートロジーは何を意味するのか。この拙文の脈絡から行くなら、勝負とは元来真剣で行うのであり、この勝ち負けを死合いに重ねるものを試合とした。そう位置づけることで、ここで言う「無観客試合」を理解しようとしたのだ。繰り返すことになるが、試合でやり取りする勝負は真剣でこそ決着する、とするなら、なぜその試合を、駄目押しするように「真剣」

と念押しせざるを得ないのか。それは「試合」が「試合」でなくなり、かつての「試合」に対する追憶と記憶が忘却の彼方から「真剣」という言葉呼び寄せるのだ。不謹慎にもソシユール風に言えばランゲージュの再配列が行われたのである。関係構造からいえば交通形態の変容なのだが、さてこれはわれわれ精神の、自然成長過程として変容したのであろうか？別稿を起さねばならぬ領域に突入することは避け、誤解を恐れず言い放つが、これでは『龍馬はいかない』であろう。私たちの引き受けてある近代は、いくつかの世界大戦を持ってきたではないか。同時に連合赤軍「事件」はある。つまり、先日の、三年一組の教室に投げ込まれた、火薬入りの瓶を、どう演劇的に解決できるのかということである。残念ながら、われわれの演技論は、その爆発の前で佇んでいる。そして明確にいえるのは、火薬入りの瓶の対極にあるものが「無観客試合」という概念である。

「試合」から「無観客試合」への推移は、「勝負」から「真剣勝負」への変容性に重なる。この、「勝負」から「真剣勝負」への変容性の中にあるのは、われわれが引き受けてある近代、これらを上記のようにイデオロギー（＝ドクサ）としてマニフェストするのはそう意味あることとは思わない。それはまた、換言して「勝負」から「真剣勝負」への推移が、文化成長過程として、われわれの持つ攻撃性や、テロリズムの非生産性を官許の元に去勢するという経済性のみで置き換えられたものだ、と言い放っても同時に意味がない。つまり「勝負」から「真剣勝負」への推移を歴史成長過程と位置づけしちゃう仮設は、「投げ込まれた、火薬入りの瓶」としてあるこの今を、無批判に追認するだけのこと以外ではないからである。

さて、これらはそうあるという前提である。話しを進めるには、これらのカテゴリーに対し身体を置くという作業である。当然それは演技論である。この表現行為という視座で「無観客試合」の「観客」を見ていくことにしよう。

まずは「観客」という言葉が、スポーツと呼ばれる現代的な語彙の中に、どのように閉じ込められているのかを、炙り出す事になるだろう。かといって、スポーツ原論があると仮設して舞台表現という物事を進めてきたわけではないので、そうせず、むしろ、表現における観客という観点から接近して荒書きすることが、ここでの道筋である。つまりまっとうにそうせざるを得ないのだ。

たとえば、あるテレビを見ているとき、スポーツ中継アナウンサーの「高橋尚子選手が、沿道の観客に向かって、手を振り声援にこたえています。まもなく四〇キロを過ぎます」という発声をしたとしよう。ここでの、このスポーツ中継アナウンサーは状況を、スポーツ、一人のマラソン選手、観客という絡みで紡いでいるわけだ。一人のマラソン選手が観客に対し、状況をマラソンしている。では、観客は誰に対してなのか、といった細部に踏み込む勇気はない

が、スポーツ中継アナウンサーは、一人のマラソン選手がマラソン競技を行っている状況に、もう一つの何かを付加したのだ。スポーツ中継アナウンサーが沿道の観衆を観客と呼んだとき、一人のマラソン選手は、表現という属性を背負ったことになる。スポーツが表現に成り下がった瞬間である。つまりスポーツは何かに成り上がることもできないし、成り下がることもできないという意味である。このマラソン競技がイベントとしてあったのかどうかということとは関係ない。スポーツはスポーツであり、表現は表現である。

ここでの意図を明確にするために「スポーツは表現か？」と問うことにしよう。それは表現であると同時に表現でない。トートロジと逆説のオンパレードだが、それはこうだ。スポーツとは対他性においては競技であり、対自性においては表現である。では表現とは何か？

ここまでの「1」から「3」は、闇黒光の文責で、2005年06月10日に『Blog 大阪演劇情報センター/更新記録・編集後記 ODIC』に綴られたものである。参照 URL は「http://info.odic.ne.jp/yami/b_log/P_BLOG/」である。

4 情報としての観客 = 演技論の地平

行きがかりとはいえ、思わず「表現とは何か？」などと問いかけてしまったことに後悔しきりである。当然、これに真っ当に答え切る力量はない。

ならばこの拙文の出発と、自問の意図に還り、思いを絡みとるしかない。幸いなことにかどうかかわからないが、右記の「3」から、この「4」へは意図的に、ほぼ一ヶ月の時間があつた。書きなぐった思いは頓挫したことになってしまったので、その後思いも動く。これを整理することから始めよう。

所期の思いは、そう複雑なものではなかつた。仮に「無観客試合」という言葉が実体化してあつたとして、そこで屹立するイメージへの違和とは何か？これを整理することで、よしとする魂胆であつた。だがさて、ことはそういうことだけではないようである。つまり「無観客試合」とは、様々な語り口はあるだろうが、この拙文でした、試合の形式を規定する用語ではなく、観客に纏わる概念の問題であるとせざるをえないのではないか、となる。ここに、思わず「表現とは何か？」などと問いかけてしまう脈絡があつた。これが整理の大枠である。

できれば、サッカーには「無観客試合」というゲネプロ（オペラなどでは、初日の前に、本番どおりに行う稽古のことをいう、ともの本にあります。演劇業界でもそうかもしれません。アリアリの稽古です。バックツアーなどで、

見学の方は居るかもしれませんが、観客はいません。Generalprobe = ドイツ語) のような試合があるんだ、ということで通り過ぎたいのであった。しかし、これはFIFAの国際試合である。そこで「無観客試合」と宣言するのである。世界規模のイベントのなせる業であろうが、うがっていえば「ゲネプロは本番です」というのである。

このとき「はいそうですか」といえないのは、ここで問題をこう仮設するからに他ならない。ことはサッカーの問題ではない。「無観客試合」という言葉がありえたという、私たちの状況の問題であるだろうからだ。それが「無観客試合」という概念でもなく、またイメージでもなく、である。この言葉が状況として成立しえたということは、そのバックボーンがすでにあり、それが「無観客試合」という価値で成立することにより、物事の関係は変容したということの意味する。それはまた、表現行為が見定めることを余儀なくされる観客の在り処が、これまでとはずれてある、ということになるからである。

換言するなら、無名性のなかに観客がいるであろうと想定したゲネプロと、あらかじめ観客を拒否して、観客を想定することは、決定的に異なる行為である。

多分、演劇営為が、見る観られるという相対性の磁場から抜け出し、可能性としての関係性を行為する作業であるならば、必ずや見るという行為は、体験から経験に登りあがる作業として、舞台上上がり役者たらんとする俳優の前に、俳優の対自性を含んで起ち現れずにはおかない。これが無名性の中に観客を想起するということであり、結果、演劇営為は可能性の実態を私権化して、行為するという役者たらんとする身体のうちで、演技を捏造する方法へ至ろうとするものであるのなら、この観客の在り処のずれは、何をもたらすのであろうか。

私はいま、注釈をことさら加えず、未知座小劇場の演技論をマニフェストめいて語っているのは、その演技論を情報論として語るしかない逡巡からくる。端的にいえば、ここでいう「見る観られるという相対性の磁場」は、もう遠い昔の《昭和》という時代にあった物語としてではなく、あらためていうまでもないが、それは今日でいう情報としてあるからに他ならない。情報 = 物語についての何ほどかを語らねばならないのだろうが、このあたりの「情報と演技」に対する位置付けは、別途拙文として『情報と演技について』や『演技について』(<http://info.odic.ne.jp/yami/engeki/ron/ronsyu.php>)があるので参照願えれば幸いである。文脈上概括するなら、行きはぐれてしまった「観客」や「物語」への望郷の眼差しを、別名としての「もう一つの物語」あるいは「ありえてしまった未来」に送るのではなく、あるいはまた「すべてを概括するかのようであった、物言わぬように物言う日常」を嘯くように、凝視するのではなく、百花繚乱の情報論の海へ竿さし、それに耐えうる演技論を行為するを良とした。

だが、いま演技論は情報論を装いわれわれの前にあるのだ、と揚言したのであった。

さて、この「4 情報としての観客」は前節の『表現行為という視座で「無観客試合」の「観客」を見ていく』ということから始めたが、思いの丈で強引に纏めているという感を免れ得ない。それは、素直に文章化することが出来ず、こう「纏める」ということでしか文意を運べない、私の現状を示してあるといえる。そうはならじとするなら、素描しようとしてきたイメージを提出し、この纏めに繋げておくことで、この拙文を終わることにしよう。

5 卑弥呼の踵

舞台という形式をどこから想起するのか、ということにもなる。それは、どこまで時間のネジを巻き戻しておくのか、ということである。またそれは、削ぎ落とすことの出来るものはすべて削ぎ落とすという仮設である。この社会性を帯びた表現という鏡に「無観客試合」はどう映るのか。

もちろんこれはイメージの話であり、その原初形態から前述した「無観客試合」を見ようとしてきた。ここでいうイメージというのは、ロマン・ロランの「花で飾った一本の杭」のようなものである。このロマン・ロランの「杭」は祭りの原初形態と読むのだが、さて舞台の原初形態は。

原始共産制。雨乞いが行われている。それは共同体の意思である。「薪くべ」が行われて炎が舞う。祭壇がある。その前で巫女は御託宣を求める。それらを前に人々は祈る。ここにいる巫女は、私の場合は「事鬼道 能惑衆」の卑弥呼である。やがて御託宣がおりる、それは御託宣がおりたと装うことかもしれない。ともあれ卑弥呼は踵をかえず。

踵がかえたこの瞬間こそ、世界史のなかで舞台が成立した瞬間である。これらはすべて儀式の一環であるかもしれないが、そのとき卑弥呼は、人々と萬神の間に割り入り、自身を物語ろうとしたのだ。祈る人々は、一瞬に観客に転換した。余談になるが、舞台にあがり役者足らんとする俳優の、この踵をかえずという様態は、何ものかを一瞬に異態に転換する行為のことである。人々はこれを演技というが、技とするにはおこがましい。ということで、できるなら、あらかじめ役者である能役者と言われる方々にお任せしたいのが、偽らざるところである。だからといって、舞台にあがり役者たらんとする俳優はアンドロマックよろしく「天におわす我らが大神様よ」というわけにはいかないのである。つまり、ここでの構図は、卑弥呼の前に観客はなく「無観客試合」がある。また観客の前には卑弥呼はおらず「無観客試合」がある。

この拙文で出発してあった「違和」は、卑弥呼の側からする「演技論」であると括ることができるだろう。また、観客の側からするそれは「情報論」であるしかないのだ。この二つは、ゆきはぐれてある。唐突に聞こえるかもしれないが、この拙文に隠された、舞台で行為することのリアリティーのなさや、物語の不可能性は、ここでも論証できるはずである。これらを前にして、逃げを撃つのは容易い。この「演技論」と「情報論」をまとめて情況論として語ればいいのである。もちろん逃げであっても、それが現代的な課題や思想的課題、あるいは演劇的課題に対し何らかの仮説を提示したものであれば、それは一つの営為であり、一つの可能性である。当たりをつけていえば、それでは現象学としての論にならないのである。このジレンマこそ『演技について ~ 無観客試合と演劇 ~』という拙文であるということは言をまたない。

繰り返すことになるまえに「無観客試合」にかえろう。であるが、これまたあるイメージになる。これを提出して終わりにしたい。

前述で、舞台の基点を卑弥呼の踵にもとめた。そこからの「無観客試合」のままでは、ついにそれは単なる総括に過ぎない。すでにお分かりのように「無観客試合」は総括の対象ではないのだ。それは課題であり、可能性である。そうであるなら、もう一つの視点が必要であった。仮に卑弥呼の踵が千年の向こうなら、千年のあちらが必要となる。来年のテント公演でも汲々しているのに、なんのホラだというのは請け合いだが、これは大向こう受けを狙った法螺なのでご勘弁願いたい。ここに「虚体」をおきたい。「虚体」といえば埴谷雄高の自同律の不快としての「虚体」であるが、自同律の和解としての「虚体」を本歌取りするのである。たとえば「わたしが蝶であるとするとき、わたしは蝶である」としての、自同律の和解としての「虚体」である。向こうとあちらの幅のなかで、こちらの「無観客試合」を、自同律の和解としての「虚体」から見定めることを試行する。もうことは「無観客試合」でなくなるのはいたしかたない。

やはり最後にお詫びするしかないようである。論拠や出典を示さないままの軽業師めいた展開は、当然響きをかう他ない。ただ、ここで綴ったのは論文でも演劇論でもない。それは、未知座小劇場がする現場からの報告である。この一点は、最後まで手放さなかったつもりである。この意味で黙許願えれば幸いである。

さてさてこのような中での、今回の公演『大阪物語』は、来年のテント公演を射程した、このいまの行為となっている。それは行きはぐれてしまった、テントという最も古典的な領域に視線を贈り、百花繚乱の情報論の海から、自殺行為にもた綱渡りをしようという図であるから、もうこれは「あつは、ぷふ

い」というしかないのであった。

こうしてついに、この拙文も『大阪物語』で何らかの具体性を差し出すしかないというところにたどり着いたようである。一つの糧にと台本執筆中にもかかわらず「無観客試合」へ絡みとられてあるであろう情報論を見定めることを望み、この『演技について ~無観客試合と演劇~』を綴りはじめたのだが、その思いもまた、日々の稽古の中に切り刻むしかないようである。

『演技について ~無観客試合と演劇~』の「添付資料」への掲載にあたり、全体を各章に分け小見出しをつけた。初期の文にはこの小見出しはない。
(2005.09.02 記)

.....;
;
; 未知座小劇場第38回拠点興業+鹿狩道三追悼公演上演台本 ;
; 『大阪物語』 ... 大日本演劇大系第五章 Composition16 ... ;
; 著 者・闇黒光 ;
; 発 行・未知座小劇場 ;
; 発行所・大阪府八尾市佐堂町2丁目2の17 ;
; 発行日・2005年8月21日 初 版 ;
; 2005年9月 2日 第1版 ;
; 定 価・2000(1500ぼちぼち)円 ;
; U R L・<http://未知座小劇場.jp> ;
;
;